

(注) この物語に登場する人物は、一人を残して全員死亡する。

【裏切者のモノローグ】

愛とはなんだろう。絆とはなんだろう。

私は鏡を前にして、じっと考えることがある。

私の顔の皮膚は、柔らかい粘土でできている。

それは私が動かそうとする通りに動き、いろいろな表情を形作っていく。みんなが笑っていれば私の顔も楽しそうに笑い、みんなが悲しそうにしていれば、私の顔もしゅんとする。

それは生きるということのルールであって、愛されるための策略だ。そうやって表情を変えてみんなと笑い合うのが幸せに生きていくということなのだ、顔の皮膚を操りながら、裏で私の心は了解している。

私の目の奥は、暗く深い井戸へと通じている。

井戸の底には一滴の水気もなく、いつもからからに乾いて干乾びている。

私は皮膚を操り台詞を読み上げ、井戸へと水を入れてもらう。だがどんなに清涼な水を注ぎいれても、井戸はたちまちすべての水分を吸い尽くし、水が溜まったことがない。私はそんな乾いた井戸の底へと、頭を下にし手足を放り出して、ずつとずつと落ちつづけている。

そのことをシスターに言うと、シスターは顔を歪めすすり泣きをあげながら、私を抱きしめ頭を撫でてくれた。何も怖がることはない、大丈夫だから、と何度も何度も繰り返し、私の髪を優しく梳いてくれた。

私は泣いて、歳月をかけて、それを笑顔へとグラデーションさせた。

騙そうと思ったわけではない。ただ私の皮膚がそうやって動こうとし、私はそれを見守りながら、興を削がれた観客のように、やる気のない拍手を送っていただけだ。

シスターはそんな私を見て、ほっと安堵したような吐息をついていた。シスターも孤児院の他のみんなも、誰一人私の目の奥の井戸に気付かなかった。

私の顔は笑い、私の身体はみんなと肩を抱き合いながら、顔の皮膚の裏で私は考え続けた。愛とはなんだろう。絆とはなんだろう。それは一体、いつ私を満たしてくれるのだろうか。

井戸が渴いて仕方ないのだ。

どんなに清涼な水を注ぎいれても、たちまち渴いて干乾びていく。
もっと、何かを。渴くことのない粘度を持った何かを。
みんな私を助けてほしい。
井戸が渴いて仕方ないのだ。

【王都新聞】

トーエンハイム砦にて大量の死体発見される

昨日未明、商業都市トーエンハイム外れに位置する辺境の小城にて、集団戦闘が行われた痕跡と思われる、大量の死体が発見された。

問題の城は極右組織『闇ノ目』が所有し、基地・及び施設として使用していたもの。同組織はテロ破壊工作の疑いで、王都警備騎士団の第一級嚴重監視対象に指定されている。主力メンバーと思われる九名がこの数週間同砦を使用していた。砦内からは九名全員の死体が発見され、現在解剖が進められている。

攻め入った集団については詳しい情報が入っていないが、反闇ノ目を掲げて散在する、反乱組織の一つとみられている。

こちらもメンバーのほとんどの死が確認されているが、生き残りが一名いるとトーエンハイム自治騎士団は発表している。現在騎士団が付近を捜索中であるが、未だ発見はいたっていない。

反闇ノ目組織が朝方の奇襲を仕掛け、それに気付いた闇ノ目が反撃し、戦闘に発展したと自治騎士団は見解を発表している。回収された死体の解剖と、生き残りの捜索を進め、事件説明を急ぐ方針。

【本章・第一章】

——内通者——

△戦闘開始一時間前・城中央塔頂上、ガーディアン守護人形制御室V

「さあ、ゲームの時間だよ」

男は最後に一言そう告げると、手にしていた魔導通信機の紋様をなぞり、全体通信を遮断させた。仄かに発光していた光が消え失せ、通信機が機能を止める。砦内の仲間達への放送は、それで終わりだった。

ゲームの時間。詳しい戦術の説明も演説も無く、そのたった一言で通じたようだ。砦内にいる男の同胞達が準備を始める、その気配が伝わってくる。

「待ち遠しいな」

男はポツリと、そう呟いた。

まだあどけない顔立ちをした、童顔の男である。青年……いや、少年と言った方が適切だろうか。彼が闇ノ目の頭目だと言われれば、ほとんどの人間はまず首を傾げるはずだ。

しかしすぐに気付くのだ。目を見つめるだけで人の奥深くまで侵入し腐食するような彼の気配に。ねっとり絡みつくような悪意が、男の周囲の空気に漂っている。

男はソファから立ち上がると、部屋を横切って窓辺へ立った。窓に映った自分の顔を、見透かすように眺めている。燕尾色の分厚いカーテンは、まるですべての光をその部屋から遮断しようとしているかのようなようだ。夜明けまで一時間の猶予がある今の時間、たいした意味もないのだが。

男はカーテンをさつと滑らした。陽の昇らぬ刻ではあるが、塔の頂上のこと、見通しは良い。窓の向こうに顔を向け、望遠鏡を使い、闇を切り拓くようにしばらく目をずがめていたが、やがて見つけたようだ。小高い丘の上に佇む人影の群れ。

十二人の仲間達を。

男は窓の向こうへ視線を向けたまま、愉しそうに口もとを歪めた。

「裏切者よ。ありがとう」

くくく、と搾り出すような笑い声が部屋に響いた。

「奇襲作戦も、君の密告のおかげでおじやんってわけだ。罪悪感？ 悔悟の念？ そんなものを感じる心など、君は持つてはいないはず。ボクらはヒトき。汚いヒトき。心は暗闇で満ちている」

歌うように、男は続けた。

「すべてを見つめ、すべてを理解せよ。君のために用意されたこの舞台で、仲間達が喘ぎ、苦しみ、絶望し……脆く儚い絆のすべてが、完膚なきまでに砕け散るさまを見届けよ。その過程を辿ることによって初めて、ボクらはこの世の真理を悟ることができるんだから」

男は口もとだけでくすくすと笑った。人が喜びに浮かべる笑みとは対極を為すような、どこかバランスの崩れた奇妙な笑みだ。だがその歪み具合には、陰惨とした芸術作品のような、心惹かれる魅力があった。

どろりとした視線を窓の向こうに向けたまま、男は心底愉しそうに、また言った。

「裏切者よ。ありがとう」

——開戦前——

△戦闘開始三十分前・城を見渡せる丘の上にて▽

城の望める丘の上、太く茂った大樹の陰に身を潜めるように、仲間達は集まっていた。反闇ノ目を掲げて結成したばかりのチーム。それに共に属する十二人の仲間達だ。

この十二人は幼い頃から、ともに喜びを分かち合っていた。そしてこの数年では、それまで以上に志を同じくし、各々が武術や魔術の修行に励んでいた。

すべては闇ノ目を打倒するため。

彼らは来たるべき戦いに備え、入念に準備を進めているところだった。

「ふうむ……裏門が脆そうというのは確かなんですね？」

偵察の報告を受けると、リーダーのジャンクは顎に手をやって頷いた。

張り詰めた空気にうろうろとやりだした戦馬の手綱をしっかりと腕に引っ掛け、しかし自身も緊張を抑えきれないのか、愛用の長槍を握り締めたまま、穂先で地面をとんと

ん叩いている。

「ああ。正門の方は太い鎖で施錠されてたが、裏門の方はかんぬき程度で、人の気配もなかった」

「なるほど……いいですね。運は俺達に味方しているらしい」

「しかし……」

と、慎重さを見せるのは副長のアイシャだ。やや楽観的なリーダーを支えるチームのブレインで、戦術と魔術を心得る才女である。小さな頃から頭が良く、冷静に物事を組み立てるタイプだった。人差し指を眼鏡のフレームにかけ、もう片方の手で衣の帯を弄くっているのは、考え事をしているときの彼女の癖である。

アイシャは難しげに目を細めると、意気込むジャンクを宥めるように声を出した。

「なにか、都合が良すぎはしませんか。上手い具合に裏口がそんなに手薄なんて」

「畏だっているのか？」

「あるいは」

「でも俺達が攻め入ることなんて、奴らは知らない。そうだろ？ 畏の張りようがないじゃないか」

「もしかして」

傍らに座り込んだまま目を瞑っていた魔術士のウイズが、不安げに口を開いた。頭の上に乗ったぶかぶかの帽子を、心細そうに手で撫でながら。魔術の才覚はあるのだが、小心者なのが玉に瑕だ。魔術を習得したての頃は、自分で出した炎に驚いてパニックになり、皆で借りていた街のアパートを、あやうく全焼させそうになったことがある。

「僕達がここにいること、見つかってしまったとか」

恐る恐るといったウイズの意見に、ジャンクが眉を顰める。

「まさか。充分距離はとってるし、こんな夜明け前からそんな厳重な警戒なんて、してはならないよ」

「そうだけど……」

「向こうの人数、知ってるだろ？ たったの九人だぞ。確かな情報だ。警備にそんな人数なんて割けるはずじゃないじゃないか」

「そそ、びびんなよ。楽勝だよ楽勝」

大樹の幹に背をもたせかけ、弓の具合をチェックしていたログが、鼻を撫でながら話に加わった。やんちゃで気の強い性格で、幼い頃からウイズとは凸凹の関係をしている。

存外に手先が器用なので、弓の腕はなかなかのものが。

「人数面でも奇襲って点でも、有利なのはこっちなんだからよ。楽勝さ」

「でも、敵のフィールド内で戦うわけだしさ……」ウイズはまだ不安げな様子だ。

「そこらへんはまあ、副長がきちんと把握してくれてるさ。砦の見取り図だって手に入
れて、さんざ検証したろうが。ルート、頭に入ってるだろう？」

「見取り図ね……。あれは確かな情報なんですか？」

「間違いないよ」

ウイズは肩を落としたまま、そう、とまだ不安そうに頷いた。やれやれ臆病者なんだ
から、とログは大袈裟な吐息をついて、弓の手入れを再開する。

多く魔術士は中距離戦での殲滅力の高さにおいては他に類を見ないが、接近戦での自
衛能力を備えていない。それゆえに戦においてはまず狙い撃ちにされやすいという戦場
の論理を、ログはあまり理解していないようである。護身用に近接戦闘術も鍛錬してい
るログには、そうしたウイズの危機感を肌感じられないのだろう。殊更能天気にな鼻歌
混じりに弓を手入れしてみせているのは、皆の緊張を軽くするための、彼なりの気遣い
ではあるのだろうか。

「大丈夫ですよ」

と、横からアルクが言った。ひよる長く、子犬のような人懐こい笑顔をした、チーム
のムードメーカーだ。昔から、仲間内の誰かが喧嘩をするたび、その持ち前の気質で丸
く収めていたものである。皆でこの日の雪辱戦を決意したときも、自分はサポート役に
回ると法術の勉強を始めた。やはり争いは苦手なのだろう。

アルクはにつこり笑って胸を反らせると、宙にすいっと術印を描いた。

回復系法術「祝福」の祝詞を短く唱え、

「ぼくの法術がありま——ぐほあふあへっ」

術の失敗から生じた爆発の煙に煽られて、げぼげほと苦しげに咳き込んだ。

術印が不恰好だったのか、祝詞を間違ったのかはよくわからない。

「ぼ、ぼくの法術が、ありますから……」

「わたしがいますから安心してください」

絶望的な顔をして口を引き攣らせたウイズに、その傍らに座り込んでいたイプリルが
言った。アルクと同じく法術を会得している彼女であるが、技術は彼のものよりも格上
だ。表情の起伏が少なく、無口だが、仲間達からの信頼は厚い。アイシャといいイプリ

ルといい、どちらかといえば女性陣の方が頼りになるのは、このチームのいいところか、悪いところか。

「気を配りますから」

「いざとなったらあたしもいるよ」

と、こちらはアリーの声。木の陰で忙しく腹筋運動をしながら息も乱さず、勝気そうな顔に悪戯げな笑みを浮かべる。

「法術得意じゃないけど、多少の“祝福”くらいなら、少しはなんとかなる。かもしれない」

「多少で少しのかもしれない……」

さらに項垂れるウィズを面白げに見やり、アリーは片手腕立て伏せにうつった。女のその細腕の何処からそんな力がもたされるのかは、メンバーの間でも不思議の一つだ。魔術、法術、前衛、射撃兵、斥候役……それぞれが役割分担をと得意分野を分け合ったとき、彼女は武器を選ばなかった。大丈夫かなと皆で言っていたのだが、すぐに納得した。彼女の腕は立派な凶器である。

アリーの側ではディセムが片膝をついて座り、戦い前の精神統一なのだろうか、無言のまま手に持った刃をじっとみつめている。今回は出番が無かったが、彼女は斥候役の一人であり、敵陣の偵察や潜入を得意としている。泉のように静かな気配を纏っていて、ともすれば冷たい印象を与えるが、本当は誰よりも仲間想いの人情家であることを皆知っている。自己犠牲的なのところがあった。

「……ったく」

足をだらりと伸ばして天を仰ぐようにしていたジュネが、視線を地上へ戻し、やれやれと言いたげに盛大なため息をついた。小さく舌打ちをする。気分屋で感情的。気の強い彼女は態度も明けて透けで、そこが良いところでもあり悪いところでもある。

「あいつら、時と場所を考えなさいよ。たまらないわ」

彼女の視線の先、仲間達から少し離れたところでは、がっしりと大きなライの背中と、彼より二回り小さなフィリーの背中が、並んで草っぱらの上に座りこんでいた。

二人は互いの薬指へと、指輪をはめているところだった。ライが何かフィリーに囁くと、フィリーが恥ずかしそうに顔を俯ける。

ジュネが腹立たしそうに言った。「……これから戦だつてのに、二人の世界形成しないでほしいもんだわ」

「戦いの前だからこそですよ」アルクがくすりと笑う。「どんなことがあっても君だけは守るから……とか、きつとそんなこと言ってるんですよ」

「うわー。ちよつと、戦闘中あいっら狙っていい？ ねえ、いい？」

「いいぜいいぜ、てーかオレも狙う。背後から蜂の巣にしてやろう」

「あ、あたしも狙っちゃおっかなー。ボコボコよ、ボコボコ」

「ダメですよみなさんそんなことしちゃ！ ぼくにまかせてくださいよ！」

「ごらキサマラ、同士討ちをするな同士討ちを」

リーダーのジャンクが言って立ち上がり、手にした槍の穂を地面に打ち付けた。

戦闘開始の合図に、みな冗談を止めて顔を引き締める。全員ひとところに集まり、円陣を組んで手を重ねた。

「よし、気合いれていくぞ——って、あれ？」ジャンクが首を傾げた。メンバーを一人、指でさしていき、「……一人足りない」

「ごめんー」

と木々の間から駆けてきたのは、あどけない顔立ちをしたノブルである。他のメンバー達とそれほど歳は変わらないのだが、生まれつき身体が弱く、まだ十代も半ばの少年のようにしか見えない。激しい訓練などとてもままならなかったため、戦闘能力はほぼ皆無だ。

今回も、初めは戦闘に参加しない予定だった。だが本人のたつての希望と、やはり全員で目的を達したいという思いが皆の中にあつたのだろう。無茶はしないという条件付きで、こうして付いてくることになったのだ。

ノブルは申し訳なさそうに、ちよこんと頭を下げた。「トイレいってたんだけ」

「またか。さっきも行ってたじゃないか」

「なんか、やつぱり緊張しちゃって。村のみんなの雪辱戦だもんね」

言って円陣の中に入ると、一番上にそつと手を重ねた。

「あ、手洗ってなかった」

全員散開した。

水筒を傾け手を洗うノブルを横目に、ジャンクは肩を落として盛大なため息を吐き出した。もういいよ、適当に頑張ろう、とぶつぶつ呟く。どうやら拗ねてしまったらしい。

「ああもう、どうしてうちはいつもこうなんだ……。緊張感の欠片もない。戦なんだぞ、ことは戦なんだぞ。もう知らない知らない俺知らない」

「ま、まあまあリーダー」と、フォローを入れるのはアイシヤの役目。「仲がiiiってことじゃないですか。いいことですよ」

「そうそ、それに勝るものはなし」

「そんなに力まなくても、楽勝よ、楽勝」

「そーそー」

「それはそうだが……でも、気を引き締めていきたいんだ」

あくまで呑気な面々に、ジャンクはぼつりと呟いた。

「……一人でも犠牲になつてほしくないから」

「……………」

ほんの些細な呟きに、場がふっと静まりかえつた。

皆の視線を一身に受け、ジャンクは照れくさそうな笑みを浮かべた。

「みんな大切な仲間だからな。絶対に一人も失いたくない。信頼してる。でも無茶だけはしないでくれ。雪辱戦……でも俺達が死んでしまったら元も子もないだろ？ 全員無事で、帰ろう。闇ノ目を叩き潰してやろうぜ」

ぐいと差し出されたジャンクの大きな手に、無言のうちに手が重なっていった。信頼と絆で結ばれた仲間達の手が、しっかりとした重みとなつて手の甲に伝わる。

彼らは知らない。この重なった手の中に一つだけ、異質な者の手が混じっていることを。信頼や絆を感じるこのできない指先が、仲間の死体の数を数えていこうとしている指先が、その中に含まれていることを。

にこやかな笑みの裏に隠された空虚を、彼らは最後まで見破ることができなかった。

○人。

【ヨムズ村 村長の息子の日記】

今日はトーエンハイムの孤児院へ行ってきた。

捨て子やみなしごを引き受けていた昔からの孤児院なのだが、資金と税の関係で、近々

取り壊されてしまいうらしい。どうか子供達を何人か引き取ってはもらえないかというところで、シスターから連絡を受けたのだ。

うちの村もほぼ自給自足で生活している以上、決して豊かとは言えない。だが過疎化の進んでいる現状、子供は将来の労働力になるし、私だって孤児院の出身だ。昔世話になった人の頼みを無下にすることもできないだろう。義父と相談し、一人か二人ならということ、引き取るようになった。

だがいざ行ってみると、選ぶということに酷く難儀してしまった。シスターが横で、引き取り手がないと路頭に迷うことになってしまふ、と繰り返すものだから、この決定が彼らの運命を左右するのだと思うと、非常にやりにくかった。

しかも子供達はみな仲が良く、離れ離れになってしまうのだということを察するやいなや、堰を切ったように泣き始めた。本当に悲しそうな声で泣くものだから、胸が詰まってしまった。引き取る子の機嫌をとろうと持ってきた小さな花の束を、みんなに一本ずつ渡してあやし、ようやく泣きやんではもらったものの……さてどうしたものか。

困って義父に連絡をいれた。相談の結果、結局十二人全員引き取ることになりそう。うちだけではつらいだろうが、みんなとても良い子供達だから、村の皆も気に入って協力してくれるだろう。子供が成長したり都へ出て行ってしまったら、寂しがっている者も多い。あるいはちよいどいい活気になってくれるかもしれない。

とりあえず、子供達はまだ孤児院で眠っている。さつきもう一度様子を見に行ったら、おしくらまんじゅうのように固まって、すやすやと眠ったまま手を握り合っていた。仲の良い、いい子供達だ。引き取る以上は、責任を持って育てなくては。

ただ、一人だけ、見透かすような冷たい瞳で私を見上げた子がいた。一瞬のことだったが、背筋が冷たくなった。冷たいナイフを喉に押し付けられたような恐怖感が、なかなか拭えそうにない。

いや、気にしすぎだ。疲れがたまってナーバスになっているのだろう。その後見えていたら、にこにこ笑って皆と遊んでいたことだし。

私が神経過敏になってどうするのだ。明日から、頑張らなくては。まず顔と名前を覚えなければ。

さて、もう寝よう。明日は朝から子供達を迎えに行かなければいけない。

泣かれてしまったときに備えて、また小さな花でも持っていくことにしよう。子供たちはあの花が気に入ったようだ。真っ白い小さな花。彼らにぴったりだ。

【本章・第二章】

——矢の雨——

城の正面、攻撃者達を阻む役割を担った巨大な正門は、臨む者の戦意を萎えさせる偉観を誇っている。

戦術級魔導器をもつてしても小揺るぎもしそうにないその扉には、芸術作品としても値がつけられそうなほどの、緻密な意匠が施されていた。門の左右には、それぞれ監視塔まで抱えていた。そこから城を突破しようとするのは、よほどの勇者かでなければ馬鹿のどちらかだ。

皆はそんな正門には目もくれることなく、丘から森を大きく迂回して、城の裏側へと抜け出た。

城をぐるりと取り囲む城壁。埋め込まれるように据えられた小さな裏門は、正門とは違って木製だ。見た目にも強度や厚さが足りないことがわかるうえ、たいした封印もされておらず、力をこめて何度か揺すると、扉の向こうでかんぬきがへし折れた。そのままになっていた。

アイシヤが顔を曇らせる。

「何故……こんなに無防備なのでしょう……」

「裏から敵が来ることは、あまり想定されてないんじゃないか？ この砦」

戦馬に乗りつつジャンクが返した。基本は固まって行動するのだが、万一ばらばらになったときに備えての援護役・遊撃役を彼は担っている。本人は一人だけ馬に乗って皆を見下ろす格好になるのは、好きではないらしいが。

逸る馬を抑えながら、ジャンクは続けた。「ここ、足場悪いからな。大人数が攻め込むのには向いてないだろ」

アイシヤはゆつくりと首を振る。

「迂回の途中、遠目に正門が見えましたが、あれはかなり頑強なものです。今は闇ノ目の所有ですが、大昔に付近一帯を支配していた王が建てた、もともと軍事用の砦ですから。裏門だって、そんなに手薄なはずがありません。この扉も——あるいは——」

アイシヤは言葉を切ると、扉に手をかけ、ゆつくりと押し開けた。

きしんだ音とともに開いた扉の向こうには、一直線に石畳の細い通路が走っていた。

左手に外からの侵入を阻む塀、右手には城本殿の壁がそびえ立って見下ろしており、まるで壁が倒れかかっているような圧迫感を覚える。

道は遙か向こうで、右に折れている。城本殿の周囲をぐるりと回り込むようになっていたのだ。その間に、脇道のようなものは存在しない。背の高い壁によって陽の光の遮られた薄暗く細い道が、ただ単調に続いているばかりだ。

「……誘い込んでいる、と言う方が適切なのかもしれません」

アイシャは言うのと、指をさした。

道の中程、曲がり角への中間地点。その両脇の壁の上方に、小さな監視台が据えられている。左の壁の上からによっきりと突き出した塔のような格好をした一本と、右には城の一部、テラスとして張り出しているそれ。

ウィズが震えた声を出す。

「あんな監視塔、見取り図にあった……？」

「見取り図には、ありませんでしたが……」ちらと伺う。「ともかく、あそこから射掛けられたら、ひとたまりもありません。この細い道では狙い撃ちにされます。見通しが良すぎて、逃げ場も隠れ場所もない。この裏門は脆いようにみせかけて、むしろ正門よりも悪意に満ちているように思います」

ごくり、と誰かが唾を飲む音が聞こえた。広がった緊張感を馬が察知したらしく、うろろやりだそうとするのを、ジャンクが手綱で引き締める。一瞬だけ彼も不安そうにしたが、次の瞬間には強引に振り払った。

「でも大丈夫だったんですよね」

広がりそうになる仲間の弱気を感じ取ったのだろう、ジャンクは皆に聞かせるための力づけるような声を出して寄越した。

皆に向き直り、

「ここから行くしかないよ。正門を突破するのは無理なんだから」

「それはそうなのですが……」

「いくら罠のような構造をしているとしたって、それが使えるのは敵の存在がわかっているときだけだろ？ 戦で敵軍がまとまって攻め込んできたときに、射掛けて数を減らすっていう。攻城戦用の」

「ええ。昔はこの辺りも戦が多かったですから」

「でも今回はそうじゃない。俺達はいくまで、一方的に制圧してしまうんだ。ともに

争うつもりはないよ。一気に押しかけて、全員ふんじばって、後は騎士団に委託。中を家捜しすれば奴らを逮捕できる証拠だって出てくる。それさえあれば騎士団だってちゃんと動けるって……そういうことだったろ？」

「もちろんそうなのですが……」

「敵が起きだしてくる前に、さっさとこんな道、抜けちゃえばいいんだよ。大丈夫。奴らは今頃ベッドでいびきでもかいてるさ」

しばし考えるような沈黙の後、アイシャはゆっくりと頷いた。

ジャンクを先頭に、皆が裏門をくぐっていく。

確かに、城はまるでそれ自体が眠っているように静かだった。敵がてぐすね引いて待ち構えているなどとは、恐怖による幻だと呑み下してしまえるほどに。偵察の報告もそれを後押ししていた。首をもたげる警戒心は、大丈夫、と勇気づける声の中にゆっくりと霧散する。

信頼しあった仲間達だからこそ、気遣いとフォローができ、弱気でバラバラになって四散しない。これが烏合の衆であれば、根拠なき恐怖心だけで一人また一人と弱腰になり、分解して逃げ出してしまいかもしれない。

信頼しあっているからこそ訪れる悲嘆――

苦労して手に入れた見取り図が改竄されたものだということを、彼らは知らない。

メンバーの一人の魔導通信機がポケットの中で稼動していて、こちらの会話も、息遣いも、進撃の掛け声さえもすべてが敵に筒抜けなどとは、彼らは夢にも思っていないようだった。

*

左右を阻まれた狭い道を、連れ立って歩く。

先頭のジャンクは、脚を急がせる馬の速度を調節し、絶えず後方に気を配っている。それに付き従いながらきよろきよろと視線を上方に泳がせているのはウイズだ。監視台が気になって堪らないらしい。

長い道だった。腕の良い弓手が矢を射ても、端から中ほどまでしか届くまい。左右の壁が張り出して、押し潰してくるような圧迫感。侵入者の士気を下げるための、意図的な設計に違いない。

慎重に歩き続け、道の一本目を突き当たった。

右に折れた先にも、まったく同じような道が続いている。

再び歩く。壁の隙間から切り取られた空が見える。狭い中によりやく帯び始めた太陽の光。壁に遮られ薄暗がりに沈んだ道。

忍び殺していた足音と気配が、単調な行進の中で徐々に輪郭を成す。無言の中で足音だけがリズムを作り、軽い催眠に誘われていく。歩くごとに突き当たりの壁が遠くなくていくような錯覚。立てられる靴音は独立した生き物。遠く突き当たりはまた右。歩く。歩く。

ちょうど道の突き当たりまでの中間地点。

そこに差し掛かったあたりで、地面に落ちていた影が数を増した。

「あ……」

突然誰かがあげた声は、どこか気が抜けているとさえ言えるものだった。

悲鳴ではなく、苦鳴でもなく、意味のない掠れたただの一音。

皆の反応も、どちらかといえばまだ単調なものだった。

俯いていたのを、声の方へのろりと顔をあげた者。

上方を警戒していたのに、思わず軌跡を目で追った者。

視線が交差した先にいるのは、イブリルだった。顔を上に向けたまま、固まっている。

その華奢な喉元に一本、矢が突き刺さっている。

喉を突き破り、矢の先端が赤黒く染まりながら、彼女の首の後ろから顔を覗かせている。

咄嗟に法術を行使しようとしたのか、空に手をかざしたままの彼女。その白い喉仏に添えられた矢が、酷く現実離れしていて、彼女をまるで精巧な人形のように見せている。

全員、動きを止めた。

風切音だけがまた鳴った。

一本目の矢から少し下、ちょうど鎖骨のくぼみあたりに、一瞬にして二本目の矢が生えてきた。とす、と小気味良い音。イブリルの身体がびくびくつと痙攣する。時の止まった空間の中で、その動きだけがやけに大きく感じられた。

三度目の風切音は、悲鳴とも怒号ともつかないジャンクの叫びに塗り潰された。

「走れ！」

その言葉に堰が切れたように、全員走り始めた。

風切音が連続して響き、視界の端を矢が掠めていった。ピ、と地面を叩く矢尻の音が、数多の靴音を切り裂いて通路の間に響き渡った。わあつ、と誰かが喚く音が聞こえたが、振り返る余裕のある者は皆無だった。

突き当たり、右に折れた角に飛び込む。また同じ道が姿を現す。

アイシャ、ジュネ、ウイズ、アリイが壁際に倒れこむように身を隠した。ここまでは矢も届かない。

壁に背をつけ、荒い息をつきながら胸を上下させる。

先に着いていたジャンクが、戦馬に乗ったまま皆を見下ろし、目を見開いた。ごくりと唾を呑んだ。

「こ、これだけか……？」

「あとは、多分……入り口の方向、へ……戻ったのかと」

アイシャが空気を飲み込みながら答えた。

狙撃されたのは、城を回りこむようにコの字型になった道の、二本目の中間地点だった。入り口へ戻るにも、城の中へ逃げ込むにも、等分の距離。各々の立ち位置、向き。咄嗟のことで、逃げる方向の判断が分かれたらしい。こちらは城に向かう側だ。

「無事……かな」

ジャンクがぼつりと漏らした言葉の意味が、イプリルのことだというのは誰にもわかつたろう。

誰かの言葉を期待しているらしい彼に、誰も何も言わなかった。喉に矢をはやして生きていられる人間がいらないことくらいは、誰もが承知しているようだった。だがまだ誰もその唐突な死を、呑み込めてはいないようだった。ジャンクの言葉も、どこか他愛ない世間話でもしているかのような、奇妙な非現実感がある。

「なんでよ……」

ジュネが喉の奥で唸るような声を上げた。

「なんでなの？」

「向こうに連絡をいれましょう。とにかく合流しないと――」

通信機を取り出しながら言ったアイシャの言葉は半ばかりかき消された。獣の咆哮のような喚き声が、通路の向こうから響いてきたのだ。

全員の顔色が、瞬く間にさあつと白くなった。顔を見合わせ、ジャンクを先頭にして、おそろおそろ壁の向こうへ身を乗り出す。

道をずつと行つた突きあたり、一本目の道の曲がり角に、残りの仲間達の姿が見えた。デイセム、ログ、ライ、フィリー、ノブル。腰を屈めて身を低くして、こちらと同じように壁の陰から道を覗き込んでいる。

道の間あたりには、イプリルが仰向けになって横たわっていた。喉に刺さったものの他にも何本か矢が増えていて、まるで蝶を標本にするのにピンを多く刺しすぎたように見える。

そのそば、少し入り口より、こちらにも仰向けに倒れている人影が見えた。アルクだ。

彼の両の足首には、一本ずつ、鈍く光る銀の矢が突き立っていた。矢の先端が肉を貫通してそのまま地面まで刺さってしまったかのように、彼の身体をその場に繋ぎとめている。

見ている端からまた一本矢が放たれた。太腿に突き刺さった。響き渡る悲鳴に、アライが喉の奥で掠れた悲鳴を漏らした。

「駄目！」

駆け出そうとしたアライの腕を、アイシャが掴んだ。

ひゅつ、と風を切る音がして矢が飛んだ。

アライの手前数歩の位置、見えない標的を貫くように横切り、壁に当たって乾いた音をたてる。

見上げると矢が飛んできた先……テラスのような監視台の上には、弓手の男と法術士の女が立っている。弓手は既に次の矢を弓につがえており、じいっと視線を据えてこちらに狙いを定めている。

「駄目よ。今出て行ったら蜂の巣にされる！」

「でも……！」

弓手の矢が、糸に引かれるようにすうっと動いた。再び、地面に倒れたままのアルクに狙いが定められる。そのままの姿勢で、弓手はそつとこちらを仰ぎ見た。

どうする？ とその目が問い掛けている。

「祝福“は！”

「遠いよ！ 届かない！」

這って入り口に戻ろうとしていたアルクの腕に、矢が突き立った。

アルクは半狂乱になつてもう片方の腕を振り回したが、ずるずると身体がずれて地面

に血を塗り広げるばかりで、ほとんど進めていない。法術を使うには精神集中を要する。傷口を治癒し、走って射程から逃れることは、今の彼にはできそうもない。

見ている端から矢が突き立った。

重なり合った悲鳴で音が掠れた中、近くで弓がしなる音。ジュネが弦を引き絞り放った矢が、鋭い放物線を描いて弓手の元へ飛んでいく。

だが、監視台にはぎりぎりのところで届かない。下から上への射撃は不利になるように。城がそのように設計されているのだ。矢は勢いを失って、地面に落下した。法術士の女がくすくすと笑うのが見える。

即座に向こうから放たれた矢を、ジュネは横っ飛びに飛んで回避した。壁際に身体を隠し、へたりこんでいたウイズへ怒鳴る。

「魔法は！」

「と、届かない」

「もっと前へ出なさいよ！」

「無茶だよ！ 詠唱中に殺られる！」

「五、四、三——」

弾むような声が響き渡った。

弓手が、眼下でもがいているアルクに狙いを定めながら、カウントを口ずさんでいる。

「二、一——」

「やめてえっ！」

駆け出そうとしたアリの腕を、アイシャが身体ごとしがみつくようにして抑えた。

弓手は一瞬だけ矢をこちらに向けようとしたが、すぐに戻した。アルクの動いていた腕……肘の裏側の部分に矢が突き立つ。

吠え声が爆発するのと同じ、視界の向こうでデイセムが駆け出す。

「駄目！ 戻って！」

ひゅ、と狙いを変えて放たれた矢が、吸い込まれるように彼女に向かう。デイセムは身体を丸め、転がるようにしてその矢を避けた。手について立ち上がるのと弓手が次の矢をつがえるのが同時。弦が引き絞られるのとともに、ふっとデイセムの姿が消えた。姿を消す術“透化”だ。斥候役には必ず求められる術の一つ。

弓手の矢先が迷うように揺れた。誰も見えない空間から、走る靴音だけが疾駆する。それも二、三秒のことだった。

「『解説』」

法術士の女の声とともに、周囲の空間が輝いた。『透化』を破るべく開発された、空間作用の反対法術。

手足をバラバラにして倒れているアルクの傍らに、彼に手を伸ばしていたデイセムの姿が浮かび上がる。何かのフィルムのワンシーンのように。動く暇を与えず、矢が雨のように降り注ぐ。

アルクの横に倒れたデイセムの身体が、陸に揚げられた魚のようにびくびくと撥ねた。胸に突きたった幾本もの矢。身体の下で流れ出した血が、泳ぐための赤い池を作った。

「五、四、三、二、一、ゼロ」

ぴつ、と何か小さなものが飛んで、地面に転がった。アルクの耳だった。吹き飛ばされた顔の側面が赤黒く染まり、彼は空を睨んだまま狂った悲鳴をあげた。

「五、四、三——」

視界の端でジャンクが動いた。通路を戻るのではなく、道の奥へと。手綱をとられた馬が、飛ぶような速さで駆けていく。

「二、一、ゼロ」

ぴつ、ともう一つの耳が飛んで、アルクの聴覚はなくなった。

「五、四、三——」

アイシャはアリの腕を取ったまま、虚ろな瞳で弓手の男を見やっている。アリィは血を噴き出す仲間を見据えたまま、放心したように動かない。ジュネは鳴咽を漏らしながら、首をぶるぶる振っている。ウィズは耳を両手で抑え、ぎゅつと目を瞑って下を向いていた。

「どうしてみんな、助けてくれないの？」

法術士の声が響き渡った。

花畑で遊びながらあげるような、場違いに明るく楽しげな声音。

「ぼくがこんなに痛がつてるのに、苦しがつてるのに。どうして助けてくれないんだ」

「五、四、三——」

「いやだあ、痛いよ。助けて助けて。みんな、見てないで助けてよお」

「二、一、ゼロ」

「痛い、痛いよ。指が、指が飛んだよお。みんなあ、ぼくを見捨てるの？ 仲間だと思つてたのに、信じてたのに」

「五、四、三——」

「みんなあ、みんな——」

アルクに向かって飛んだ矢が、狙いを僅かに反れて地面に落ちた。さらに続いてもう一本。

だが矢が飛んできた先はテラスではない。

通路の向こうから、滑空するようにして飛来した。

裏口の門付近で、ログが弓に矢をつがえている。

それを見て、ジュネが目を見開き、掠れた声をあげた。

「なにをやって——」

「殺される！」

楽しくてたまらなさそうな芝居がかった声で、法術士が叫んだ。

「仲間に殺される！」

「何を——何をやってるの……っ！」

アイシャが通信機に向けて叫ぶが、応答はない。矢だけが風を切りながら、アルクへ向けて飛んでくる。

天を仰いでいた彼の首がかくりと揺れ、顔がログの方へと向いた。仲間が自分に矢を向けていることを、認識できたかどうかはわからない。

「どうしてぼくを殺そうとするの？　ぼくたち仲間じゃなかったの？　やめて、殺さないで！　死にたくないよお！」

射程範囲ぎりぎりの距離から放たれた矢は、なかなか目標に命中しない。だが確実にアルクを狙い、その矢は空を飛んでいる。アルクの身体がぴくぴくと震えた。飛来する矢から、身体を反らせようとしている。

「信じてたのに。仲間だと思ってたのに……。この——」

アルクの身体が、びくんと一度大きく跳ねた。

ログの放った矢が、その左胸に突き立っていた。

「——裏切者！」

ばん、と大きな音が響き渡った。

テラスの奥の扉が開け放たれ、戦馬に乗ったジャンクが姿を現した。そのまま突っ込むように槍を構えて駆け出す。

法術士の女が小さく祝詞を唱えると、その足元に白い光が泉のように溢れ出した。ジ

ヤンクが槍を突き出す一息前に、すっと身体が溶けて消えていく。くすくす、と楽しうな笑い声だけが尾を引いて、それもすぐにふうっと消え去っていった。

すぐさま槍を構え直したジャンクに、弓手の男が矢を向けた。だがまばたきの瞬間の肉薄に照準は間に合わない。矢は鎧の端を掠めていった。近距離の戦闘で弓が槍に叶う道理はない。すぐさま突き出された槍が男の腹を抉る。衝撃に男の身体はエビのようにに仰け反った。手から弓が滑り落ち、テラスの床に当たって乾いた音を立てた。

「んの野郎お……ッ」

ジャンクがさらに力をくわえた。男の腹を突き破り、腰のあたりから血にまみれた槍の尖端が顔を出した。槍に身体を支えられて目を剥いた男の身体が、まるで糸に吊られた操り人形のようにふらふらと揺れる。その槍に一体何人の人間の身体を刺して吊すことができるのか、今のジャンクなら試すかもしれない。

魅入られたようにその光景を眺めていた一同。

沈黙を破ったのは、アイシャだった。

「リーダー！ 危ない！」

首を巡らせると、テラスの真向かい、もう一つの監視台の上に、巨大な人影が現れていた。拠点防衛を目的に開発された、魔導力で動く鉄の人形。守護人形だ。

人間の姿を大雑把に模した鋼鉄の巨人が、監視台を占領するように立っている。ギシ、と軋んだ音をたて、その上体がジャンクの方へ向いた。腕がゆつくりと動き、人間の背丈を優に超えた大きさの弓に、人の腕よりなお太い鋼の矢をつがえた。

ジャンクが槍を引き抜こうと力をこめるのが見えた。だが肉が絡みつきでもしているのか、すぐに抜けるはずだった槍は、なかなか戻ろうとしない。

焦って槍を捻った拍子に、傷口から血が噴き出して彼の顔を濡らした。べっとりとした血糊に目を潰され、ジャンクは慌てて目元を拭った。

弓のしなる音が響いた。

「リーダー！ 逃げて！」

「目が――」

風の唸る音とともに、ジャンクの上体が弾けるように揺れた。そのまま馬から落ちそうになるのを、左手で手綱を握り締めてしがみつく。血糊の張り付いた目を固く閉じた彼は、果たして自分の右腕の付け根から先がなくなっていることに気付いたろうか。ぷつりと切れた赤黒い肉の隙間から顔を突き出すようにして、かすかに白っぽい骨が覗け

て見える。

主人の動揺を感じ取ったのか、馬が切り裂くような鳴き声をあげて走り始めた。方向も定まらず、テラスの上を縫うように駆ける。ジャンクが手綱を引くと歩を緩めかけたが、首を掠めるように矢が飛ぶと、すぐさま甲高い声をあげて暴走しはじめた。

片腕だけでは支えきれずに、ジャンクはテラスに放り出された。勢いのままに石床の上を二度、三度ボールのように転がる。

パンツと音がして馬の頭が中央から割れた。熟したスイカを割ったように赤い飛沫が噴き出し、柔らかそうな脳漿が飛び散った。頭を失ったまま身体の勢いは止まらず、テラスの端から柵を越え、地面に落下した。足が空を掻くように痙攣し、動かなくなる。

時間は、止まっていた。左腕を床について身を起こしたジャンクと、弓に矢をつがえる鋼鉄の巨人以外、誰も動いていなかった。頭上で行われている凄惨な舞台から、目を離せずにいる観客のように。

ジャンクはなんとか立ち上がったが、視界は晴れていないようだ。首を巡らした先には壁しかない。

きりりつ、と弓がしなる音に、振り返ったときにはもう遅い。

「走りなさい！」

アイシャが通信機に向かって叫ぶのと同時に、ジャンクの左腕が吹き飛んだ。くるくる回りながら宙を飛び、ぼすつと音をたてて地面に落ちる。彼の口がなにか言葉を発した。え？　と言ったようだった。アイシャの言葉を自分に向けられたものと思ったのかもしれない。

「みんな、走って！」

アイシャが絶叫した。向こうの曲がり角で立ち尽くしている仲間達へ向けて。今、彼らが立っている場所から入り口までの一本目の道にも、守護人形が現れているはずだった。逃げ道が封じられていることに、アイシャは気付いている。

呼びかけられても、彼らは呆然と立ち尽くしたまま動こうとしない。そのまま石になって固まってしまったようだ。アイシャはなお叫ぶ。

「走りなさい！　そこにいたらすぐ追い詰められる！　走って！」

鉄巨人が矢をつがえた。ほんの少し停止してから、ジャンクに向けた。彼は腕をなくして歩き方も忘れてしまったように、その場に棒立ちになっている。

「今しかないのよ！」

ジャンクの身体が吹っ飛んだ。腹に太い矢が突き立ち、血が霧雨のようにぱあっと噴き出した。腰から地面に打ち付けられ、彼は立ち上がることもできずに座り込んだ。状況が理解できないのか困惑したような表情をして、傷口から流れ出した血が下半身を真っ赤に染めていく。

入り口付近で立ち尽くしていた仲間達が走りはじめていた。矢を生やして息絶えているイプリル、ディセム、アルクの屍を超える。途中、ノブルが血のぬめりに足をとられて転倒した。足から胸、顔まで、絵の具でも塗りたいように真っ赤になりながら、すぐに身を起こして再び走る。

シュツとジャンクの胸に矢が吸い込まれていった。硬革製の鎧も、鉄巨人の豪腕から放たれる丸太のような矢の前には薄紙に過ぎなかった。鎧を貫いて胸から背中へ矢が飛び出し、勢いに首がかくつと上を向いた。どうぞ狙ってくださいと、喉笛を差し出しているようにも見える。

矢が飛んだ。

ぶつと首が切れてジャンクの頭が飛び、続いて矢が下へ向けられたときには、仲間達はみな曲がり角の物陰へ駆け込んでいた。鉄巨人はしばらく左右に首を振り向けていたが、標的がいなくなったことを認識し、凝固した。あとには屍だけが残る。

死んだのは……一、二、三、

四人。

――動揺――

ようやく辿り着いた城の入り口を前に、仲間達はへたりこんだまま動こうとしなかった。

みな虚ろな瞳で地面を睨んだまま、息づかいの音だけが響いていた。そうやって呼吸をしている間は、言葉を発することをせずに済む。言葉にしなければ現実を認識せずに済むと信じているかのように、彼らは黙り込んだまま喋ろうとしなかった。

太陽が、広がり始めた雲にさあっと陰った。

どうして……とジュネが呟いた。俯いたままのくぐもった声が、沈黙の中にふかりと

浮いた。

「どうして、こんなことになったのよ……」

「……やっぱり、気付かれてたんだ……」

弱々しい声でウィズが言った。腕で自分を抱くようにしたまま、壁にもたれて縮こまっている。

「僕達が攻めること、気付かれてたんだよ……」

「そんな」アイシャが口を挟んだ。「そんなはずは——」

「でも、待ち受けられてたのは事実じゃないか。これだって……」

と、顎をしゃくり、まるで招き入れるように開かれた入り口の扉を指した。

「準備万端いつでも来いって、そんな風に見えるよ……」

「でも、そんな……。たった九人の人数で、夜明け前の奇襲を察知するなんて……。このところ闇ノ目への抵抗運動も無かった。警戒は緩んでいたはずです。だからこそ、警護も付けずにこんなところに来たわけでしょう。察知されたなんて」

「そうだけど、でも実際に……」

「ルートにも気を配ったし、事前の情報でもない限り——」

アイシャはハッと口を噤んだが、既にジュネが顔を上げていた。

「事前の情報……？」

目を見開き、唇は震えている。

彼女がこれから口にする言葉を悟ったのだろう、皆が息を詰めた。

「それって、内通者がいるってこと？」

「いえ」アイシャが言葉を選ぶように遮った。熱されてきた頭を冷やすよう、目を閉じ小さく息を吐く。「あくまで可能性の話です。それに情報の漏洩が、必ずしも故意的なものであるとは限りません」

「そんなことがないよう、五月蠅いくらい注意喚起してくれたのは副長よ。誰が作戦を外で喋るって言うの。故意じゃなきゃ漏洩なんてしないでしょ」

「何を馬鹿な……」ひゅつと息を呑んだフィリーの手を握り、ライが言い聞かせるように呟いた。「そんなこと、あるはずないだろ」

「なら敵のこのタイミングの良さはなんなのよ」

「それは、偶然……」

「毎朝毎朝夜明け前から厳重な警戒を施してたともいうわけ？ たった九人しかいな

いのに？　こちらに悟られないように？　いつ攻められるか、攻められることがあるか
すらわからないのに油断もせずには？」

「落ち着け。仲間にあたつてどうすんだよ」

まくしたてるジュネを横目に、ログが苛立たしげに首を振った。

吐き出された大きな吐息にカツときたのか、ジュネが射抜くようにログを睨みつけた。
立ち上がると座ったままのログに歩み寄り、頭から見下ろすようにして言った。

「……いるとしたら、あんたじゃないの？」

ログは訝るように眉を顰め、首を上げた。「……なにがだよ」

「裏切者」

「ああ？　何言つてやがんだ。なんでオレがそんなこ——」

「殺したじゃない」

小さく、しかし明瞭なジュネのその言葉は、場の隅々まで響き渡つて他の音を掻き消
していった。アルクの名を呟く。

ログは目を反らし、助け舟を求めるように仲間達の顔を仰いだ。そのまま視線を地面
に落とした。

「……仕方ないだろ」

「仕方ない？」

「あんな……鵬られてんを見殺しにしろつていうのかよ……」

ジュネは嫌々をするように首を振った。「……だからつて殺すの？　仲間なのよ？」

「……助けられない以上、介錯してやるしかないだろ」

「なにか方法があったかもしれないじゃない。それを——」

「つせえな。おまえだって結局何にも出来なかったじゃねえかよつ。ぐちぐち言うんじ
やねえ！」

「落ち着いて、二人とも」アイシャが口を挟んだ。「今は敵陣の真っ只中です。警戒しな
いと。過ぎてしまったことを考えていてもどうしようもありません。気を引き締め——」
「そんな言葉で済ませないでよ！」

ジュネが金切り声で叫んだ。両手で口もとを覆い、凄惨な死体を思い出しでもしたの
か、吐き気をこらえるように身を震わし、嗚咽を堪える。

「副長……『今しかない』って言いましたよね……。リーダーがやられてるとき。……
あの言葉はなんですか……」

「……………」

「リーダー、わたし達を信頼してくれていたんですよ？ 仲間を助けるために走ってくれたんですよ？ それなのに、やられているのを今しかないとか、捨て駒みたいに……。どうしてそんな言い方ができるんです……」

ログが馬鹿にするように鼻をならした。「……あの状況で言葉選んでる余裕があるかよ」

「選ばなきゃ駄目なの？ みんな、心の中では仲間を捨て駒にしようとしてるんだ？」

「何言ってるやがる、そういう意味じゃねえ！」

「じゃあどうということなのよ！」

「やめて！」

悲痛な声とともに、ガン、という音が響いた。アリイが壁を殴りつけていた。拳が壁にめりこみ、石の欠片がばらりと地面に落ちた。

不毛な口論が打ち切られ、もう何度目かの重い沈黙が場に垂れ込めた。空気が粘度を持って口に入り込み、全員の喉を塞いでしまったとでもいうように。

「先に、進みましょう」

ノブルが言って立ち上がった。視線がゆっくりと、宙を彷徨う。顔は青ざめ、衣服に染みついた血は、壁にこすりつけてもほとんど落ちはしなかった。

自分の凄惨な姿に気付いたのか、ノブルはくりと後ろを振り向くと、背中越しに言った。

「みんな、仲間なんだ。リーダーがしてくれたように……信頼しあわなきゃ。疑ったって、心が荒むだけで何もいいことない。信じよう。信じようよ……」

四人。

【王都新聞】

闇ノ目襲撃。長年の疑惑解けぬまま

五年前、世間を恐怖のどん底に陥れた集団毒殺事件。それに関与していたと見られる過激派組織『闇ノ目』構成員九名が、今回トーエンハイム外れで行われた戦闘によって、死体となって発見された。

五年前、トーエンハイム西方に位置するヨムズ村の村民達が、集団中毒死を起こした事件。村民の飲み水の補給源である井戸に、遅効性の毒物が混入され、偶然村に居合わせなかった者以外、すべての村民の死亡が確認された。ここ十数年に起こった事件の中で最も悲惨なものとして知られるこの事件。騎士団の調査も証拠不十分で半迷宮入りとなっていたが、これで五年前の殺戮の真相は、結局わからずじまいとなった。

使われた毒物のルートに通じていた同組織は、長らく犯行の関与を目されてきた。強固なセルシア人撲滅主義とそれに伴う各地の魔術・爆発物を用いたテロ行為、また亡くなった当時の村長との間に、付近の土地の所有権を巡って軋轢があったという情報など、同組織の怪しさを上げ連ねていけば、枚挙に暇が無い。

ほぼ黒と言われながらも摘発に踏み切れなかった理由は、実際に井戸に毒物を入れた、実行犯の目途がつかなかったことが大きい。村にいた者は全滅してしまったため、決定的な目撃情報がなく、証拠が無いまま歳月を重ね、今回終止符が打たれることとなった。遺族や亡くなった者達の心境は、いかばかりだろうか。浮かばれるのだろうか、それとも真相が知れずに歯痒いのだろうか。数年ぶりに、事件の生き残りの一人、当時の村長の子息Y氏を訪ねたが、コメントは頂けなかった。

五年前の復讐？

トーエンハイム外れで行われた戦闘において、襲撃を仕掛けた反闇ノ目組織のメンバーが、ヨムズ村毒殺事件の生き残りの若者達であったとの見解を、今朝方自治騎士団が発表した。

五年前のヨムズ村集団毒殺事件発生当時、最初に事件を発見したのは、村の若者達十人だった。たまたま街に出稼ぎに出ており、難を逃れることになったのである。今回の事件直後、本誌記者が彼らを訪ねていたが、全員行方が知れなかった。それもそのはずだ。今回の事件で亡くなっていたのは、他ならぬ彼らだったわけであるから。

調べによると、メンバーは五年前の事件後、故郷を滅ぼした闇ノ目を恨み、それぞれが武術や魔術を学んでいたという。反闇ノ目組織『龍の牙』を立ち上げ、主要闇ノ目構

成員が小城に潜伏しているとの情報を受けて、遂に仇討ちに臨んだ。ほぼ相打ち、という結果になった。

（三面に関連記事）

孤児院で育った仲間達。亀裂が？

「おにいさん、ありがとう。でも僕たち一緒にいたいんだ。離れ離れになりたくないよ」ヨムズ村元村長の息子Y氏は、今でもそのときのことを思い出すと、胸が熱くなる。

孤児院で一緒だった子供達は、Y氏が花を一輪ずつ渡すと、彼の顔を不安そうに見上げて、その願いを口にしたという。自らもその孤児院で育ったY氏には、彼らの気持ちが痛いほどわかった。当初一人だけ引き取るはずだったところを、十二人全員引き取ることにし、村全体で協力しあって子供達を育てた。子供達にとっては村全体が、大切な肉親のようなものだった。

そんな故郷を滅ぼした闇ノ目への恨み。トーエンハイム外れの砦に攻め入ったメンバー達は、小さい頃から常に一緒だった。全員が仲の良いきょうだいのようにであり、強い絆で結ばれていた。

「あの子供達が死んでしまったなんて、未だに信じられない。信じたくありません。みんな生い立ちには恵まれなかったが、そのぶん素晴らしい仲間にも恵まれていたのに」

涙ながらにY氏は語る。

「私はあの毒殺事件の日、街に出掛けていました。知らせを受けて戻ってみると、あの子達は真っ青な顔をしていて、私の胸に飛び込んでボロボロ泣きました。……みんな、闇ノ目が許せなかったんだと思います。実行犯がわからなかったとはいえ、村を滅ぼしたのが闇ノ目だったことは、誰の目にも明らかでしたから。仇討ちをしようとしていることは、私も知っていました。彼らは故郷を悼み、団結して、闇ノ目と戦ったのです。それが、こんな……可哀想だ」

『龍の牙』犠牲者Aの左胸に刺さった矢は、彼の仲間であるはずのしが使っていたものだったことが、自治騎士団の調査で判明した。戦いの最中、彼らが仲間割れを起こしていたのではないかという声が聞こえる中、Y氏や当時の孤児院のシスターは、そんなことあるわけがないと首を振る。

すべてを知っているはずの生き残り一名は、騎士団の必死の捜査にも関わらず、未だ

発見には至っていない。彼または彼女が語ってくれない限り、真相は永遠に闇の中である。

【本章・第三章】

——混戦——

城の中は薄暗かった。だだっ広い広間の中は、防犯上の理由なのだろう、窓は小さく嵌め殺しで、数も少ない。歳月の仕業か砂埃がこびりついており、太陽の光をくすませている。たいして掃除もされていないようで、暗がりの中に射した光の通り道に、きらきらと輝くように埃の粒子が見てとれる。

石床の上を足音を潜めて歩きながら、進んでいく。ところどころに据えられた勇ましい騎士像が今にも動き出すのではないかと言って、ウイズが始終びくびくとしている。

「敵は……一人死んで、残り八人、だよね……」

「ええ」

単純な戦力数的には、まだ僅かにこちらに分があるだろう。だがほとんど変わりはないし、向こうは守護人形を配している。地の利も向こうに分があった。奇襲という最大の有利点を潰された今、戦況を楽観視できている者は誰もいなかった。

そして力や魔術、戦術などとは別の次元において、敵が彼らと同じ世界に住んではないということを経験したからだろう。人に非ず悪魔と相対しているような恐怖と畏怖が、彼らの目の中に見て取れた。

一人だけ、そのやり口をまるでそよ風のように自然に感じている人間が含まれていることに、彼らが気付くことはなかった。

とどころに立てられた旗には、人間の目玉をモチーフにした闇ノ目のエンブレムが描かれており、侵入者達をじっと観察している。すべてを見つめ、すべてを理解せよ。見つめよ。理解せよ。見つめよ。理解せよ。見つめよ。

「この階段でいいんですか？ アイシャ」

「はい。正面から突破したんじゃない危険が大きいですから。こっちなら裏から回れるはずですよ……」

当初の作戦はやや変更されている。まだ敵がこちらの襲撃に気付く前に、一気に掃討殲滅、カタをつけることはもうできない。無血制圧ももう不可能だ。何より仲間を四人も殺された彼らの心が、その道を選ぶことはもう無いだろう。

となると敵の地の利をいかにして排し、裏を突けるかが問題となる。砦というのは守

る側にとって有利になるように設計されるものだ。正面からぶつかっては不利だった。階段を上がり、長細い通路に出た。人が二人並んで歩ける程度の狭い路。小さな目のような窓が並んだ暗がりの中、ずっと奥の方で十字路になっている。

「敵が待ち構えているとするなら、ここ——」

と、アイシャが懷から取り出した羊皮紙を指で示した。

「迫害の間、という広間の階段の踊り場あたりでしょう。彼らが特に武勇に優れているという話は聞きません。これまでのやり口から言って、直接攻勢は避けてくると思います。地の利を活かし、白兵用守護人形を階段下に配して私達の足を止め、頭上から矢と魔術を降り注いで一網打尽にする。これが確実です。その、裏をとりましょう」

十字路の正面の路を抜け、ルートをぐるりと回っていくと、迫害の間の上の部屋へ抜けることができる。背中と上方を突こうということだ。仲間達は頷き、真っ直ぐに通路を歩き始めた。信頼している彼女の言葉に、些かの疑問を挟む者も無い。

通路は細く、薄暗い。見通しの悪さに、先頭を歩いていたライが歩を遅めた。左手に持った大きな盾を構え、かすかな物音も聞き逃すまいというように耳を澄ましているのがわかる。

ガシャ、と大きな音が聞こえ、仲間達に緊張が走った。

奥の十字路よりさらに向こう、通路の突き当たりから、黒く巨大なシルエットがこちらへ向かってきている。近づくと薄闇の中にぼうつと浮かびあがってくるその影は、ジャンクを殺した鉄巨人と同じ——

「守護人形だ！」

弓ではなく、剣を持ったタイプのもの。斬るというより叩き潰すといった方が良さそうな巨大な大剣を携え、ガシャ、と重い足音を響かせながら通路をこちらへ進んでくる。路を丸々塞ぐような巨大な体躯。まるで壁自体がゆつくりと前進してきて、押し潰さうとしているかのようだ。

「何故……」アイシャが戸惑った声を出した。「何故、こんなところに配置を……」

「どうする？」

「まともに戦わない方がいいと思います。回復が心許ない以上、できるだけ消耗は避けないと」

「戻るか？」

「駄目！」最後尾にいたノブルが叫んだ。「階段の下からも、くる！」

「……………」

アイシャが無言のまま後ろを振り返る。必死に冷静さを保とうとしているのだろう、眼鏡の縁に手をやり、すぐに離れた。

前に向き直り、指を指す。

「分かれ道で撒くしかありません。十字路を越えられたら追い詰められます。走って！」全員、慌てて走り出した。細い通路に足音が反響する。守護人形もゆつくりと十字路に向かつてきている。鈍重な足音がガシヤ、ガシヤ、と響く。鈍い。

重い装備を抱えたライ——一番防衛に優れた前衛に歩調を合わせることを忘れて駆け抜け、先に十字路に到着したのはウイズだった。

早く、と言いかけたのだろうか、口を開けて勢いよく振り返る途中で……ウイズは石になったように硬直した。身動きしない。

「右へ！」

ライに従って走りながら、大声でアイシャが呼びかけた。だがウイズは駆け出そうとしない。

彼の視線の先……右からは刃物を構えた男が三人。左からは、守護人形がもう一体。狭い通路を阻むように、姿を現した。

「戻って！」

アイシャが叫ぶと同時に、男の一人が床を蹴った。手に持ったナイフを振り上げながら、奇声のような雄叫びとともにウイズへ踊りかかる。

咄嗟にウイズの手から放たれた魔術の炎。男は炎の中に身体を突っ込み、絶叫をあげながら横へ跳んで逃れた。

同時に動き始めた他の二人に気を取られ、追撃をしなかったのがウイズの失敗だった。新たに魔術を展開させる数瞬の間に、炎に包まれたまま、男が彼に飛び掛かっている。

「わああっ！」

抱きつくように飛び掛かれ、ウイズはそのまま背中から転倒した。魔術の集中が途切れ、現出する寸前だった炎の壁が、空気に飲み込まれるように霧散する。

倒れたウイズの上に馬乗りになった男が、ぐいとナイフを振り上げた。

「氷よ、結べ！」

アイシャが叫ぶ声。空間を切り取るように放たれた氷波が、振り上げられたままの男の右手を、ナイフごと宙に凍りつかせた。舐めるように燃えていた炎が瞬時に冷却され、

水蒸気がぶわっと噴き出した。だがウイズを巻き込まないよう規模を抑えたのか、凍りついたのは右腕だけだ。

アイシャが再び魔術の略式詠唱を開始する。視界の端でログとジュネが足を止め、流れるような動作で弓に矢をつがえた。ウイズに馬乗りになった男が、左手で腰から予備の短剣を引き抜く。ウイズは男に乗りかかられたまま動くことができない。

あとの二人の男が、屍肉を喰らうハイエナのようにわらわらと群がる。攻撃のターゲットになつていることを気にもかけずに敵を殺そうとするその様子は、半ば怨霊じみていた。三人同時。倒れ込んだウイズを串刺しにするよう、ぐいと刃を振り上げる。

その場にいた者のほとんどの視線が、ウイズ達の方へと集まった。声。

「――透化――」

ログとジュネの弓が鳴り、男の一人を宙で仕留めた。アイシャの魔術が発動し、光球が滑るように、馬乗りになった男の頭を撃ち抜く。血の花が咲く。

仕留められたのは二人だけ。もう一人の振るった刃は誰にも邪魔されることなく、ウイズの胸へと突き立った。

泥の中へずぶりと沈みこむように、刀身がウイズの胸へ潜り、体がびくん、と大きく撥ねた。そのまま刃がぐいと捻られ、醜く抉れた傷口から赤黒い血がどぼと溢れ出す。

体を守るように掲げられていたウイズの腕が、力を失ったまま宙吊りになり、振動にだらりと床へと落ちた。

「うあああああああああああつ！」

走った勢いのまま止まることもなく、ようやく追いついたアリーの拳が、剣を引き抜いた男の鳩尾を抉った。衝撃に浮かんだ相手の背後に回りこみ、男の首を掴んで捻る。首の骨が折れる大きな音が、調子つばずれの木管楽器のように響いた。男が絶命して崩れ込む。

仲間達が駆ける。守護人形が十字路に踏み込んでくるよりわずかに早く、ライがその前に立ちはだかった。盾を掲げて、振り下ろされた守護人形の一撃を受け止める。ぎん、と鈍い金属の音が鳴った。ぐお、とライの短い苦鳴。

悲鳴と叫び声が交錯し、狭い通路は混沌と化した。

「早く……っ！　あまり長くは保たない！」

ライが叫び、ぎりつと歯噛みしながら腕に力をこめた。腕の筋肉が盛り上がったままぶるぶると震える。盾と大剣が宙で重なり合ったまま、力が拮抗して細かく震えるのが見える。左の通路から出てきた二体目の守護人形が、ライの方へと向かっていく。

ログ、ジュネ、アイシャ、フィリー。後ろから四人が追いつき、呆然とウイズを見下ろしているアリーの腕を取った。誰かがノブルの名を叫んだが、返事は聞こえない。ウイズは仰向けになってかつと目を見開いたまま、なお赤黒く染まりつつある。傷口から、詰まった排水口のように、血がどつどつと溢れ出している。

仲間達が走っていくのを横目に、ライは右へ跳びながら盾を左へ受け流した。ぶんと唸るような音を立て、巨大な剣が空を薙ぐ。だが一瞬のパワーバランスの崩壊に、ライの手から盾がもぎ取られ空を舞った。ガランガラン、と金属的な音を立てながら、遊ぶように床を転がっていく。

守護人形の足元へ転がった盾を諦める判断を下すのに、彼が要した時間は二秒足らず。再び剣が振り上げられると同時に、仲間達を追って走り始めた。

五人。

——離反者——

「なんなのよ！」

通路を走り続け、ようやく後ろから追ってくる守護人形達の足音も消えていた。

皆ぞえぞえと肩で息をついている中、ジュネが喚くようにまた叫んだ。「一体なんなの！」

「みんな、いる……？」

ジュネの声を無視し、アイシャは顔を上げ、仲間達を見回した。一、二……と口の中で数え始めたその声が途中で止まる。「六人……」

「どうしたことよ！　なんでそんな少なくなったのよ！」

ジュネが壊れた人形のようにぐるぐると首を巡らした。見開かれたその目は、最早ここを見していない。一時に二人もの仲間が眼前からいなくなったのだ。理解したくもない事柄を前に、激したように彼女はまた喚き立てる。

「何処行つたのよ！」

「はぐれたんでしょう。守護人形から逃げて、別の道に迷いこんだのかと……。あの混戦では仕方ありません」

言うど、アイシャは懷から魔導通信機を取り出した。固有紋章を描いて相手の帯域に合わせ、通信をかける。反応はなく、アイシャはさらに別の紋章を描き、呼び出しをかけた。……無反応。

「……壊れたかどうかしたのでしよう」

放り出すようにそれだけ言うと、また黙り込んだ。相手が通信拒否をしているという可能性を、彼女は口にしなかった。

アリエが壁際に蹲り、嗚咽を嚙み殺しながら泣いている。ログも口を引き結んだまま、壁に背を預けて座り込んでいる。固く目を瞑り、堪えきれない何かを懸命に抑えつけるようにして。いつもからかつてばかりでも、ウイズと一番仲が良かったのはログだった。真つ青な顔をしたフィリーの手を安心させるように握りしめながら、だがライも疲れと焦燥の色を隠しきれない様子だった。座り込みながら、瞑目して顔を俯かせている。神に祈りでもしているのだろうか。もちろんここには悪魔しかない。

まとわりつくような重い空気。

ジュネが苛立つたように激しく首を振った。

「一体全体、なんだって言うの。裏から回り込んだんじゃないの？」

「そのはずです。……そのはずでした」アイシャが暗い声で呟いた。「細長い通路というのは、攻める側にとつても守る側にとつても、選びたくない地形です。突入の際に固まらなければいけないし、障害物が無いから身を潜められない。守備側の人数が少ない今回、わざわざそこで戦いをするメリットなどありません。もつと優位に立てるポイントがいくらかもある。戦力を集中させるべき場所ではないはずなんです」

「ならなんで待ち伏せされてんのよ！ 挟み撃ちじゃない！」

「偵察に発見されたか、作戦を読まれたかしたのでしよう。……ごめんなさい。私のせいです。謝っても謝りきれない」

「別に副長のせいじゃねえよ」ログが言った。「全部、妥当な作戦だったと思う。何か、おかしいぜ」

今まで通つてきた部屋では、皆十二分に注意を払っているようだったし、万一偵察に発見された場合でもそう簡単にはルートを把握されないよう、アイシャは進路に気を配

っていた。たまに「解呪」を使い、「透化」で姿を消した敵がいなかろうか確かめてもいた。それでも偵察の姿など何処にもなかった。

本当は皆、もうわかっていいるはずだ。裏切者がいるということに。だが誰もそのことを言い出そうとはしない。偵察に発見された、作戦を読まれた——そう考えているうちは目を背けていられる。かろうじて保たれている脆い何か。口に出すことによって壊れてしまうことを恐れているように。アイシャは首を振った。読まれたんです、と言う。

「これから……どうするのよ」

低く抑えた声音で、ジュネが言った。

「……進むしかありません」

「この状態で？」

「後戻りはできません。外周で守護人形に狙い撃ちにされるだけです。あいつの機能を止めないと、ここから出られない。ごめんなさい。あのととき撤退するべきでした。頭に血が昇ってた」

「はぐれたのはどうすんの……」

「探しに行くのは危険です。守護人形がまだうろついていますから。敵が制御室から魔導力を送り込んでいるんでしょう。今の戦力で守護人形と真つ向から戦うのは無茶です」

「放っておくっていうの！」

「違います——」

「あの鉄塊に襲われているのを——」

「制御室に行って操作者を封じた方がいいと言っているんです！」

沈黙が落ちた。アイシャが強い調子で声を張り上げることなどそれまでなかった。日頃耳にすることのないその声が、異常な事態だという事実を、何よりも雄弁に仲間達に染み渡らせる。

空気に細かな棘が生えて、非日常の針を肌に突き刺すのが見えるようだ。アライが掠れた嗚咽を漏らし、その音だけが大きく響いた。

アイシャの顔を怯えるように見据えると、ジュネは数歩後ろに下がった。

「……信じられない」

ぶるぶると首を振り、さらに下がる。つられるように足を踏み出したアイシャを目で制すと、矢筒から矢を一本抜き出した。

目を見開いたアイシャに向け、矢をつがえる。

「ルートを決めたのは……あんたよね……」

弓に手をかけて引き絞ったまま、ジュネは後ろへ下がる。

「敵方の情報を仕入れてきたのも、日取りや時間を決めたのも！ 全部……あんたよね……」

「何を言ってる……」アイシヤが手を挙げた。「待ってジュネ。落ち着いて。確かに、情報から作戦を練ったのは私です。でも見取——」

「あんたじゃないの！？ 裏切者は！」

「やめろ」

ライが言ったが、その疲弊した声に、高揚したジュネを止める力はなかった。

「そんな……疑ってどうすんだよ……」

「わたしは死にたくないだけよ！ 仲間に裏切られて殺されるなんてまっぴらだわ！」

「そういうおまえはどうだってんだよ！」

目を瞑っていたログが、突然吠えるように叫んだ。こめかみがぴくぴくと震えるのが見える。

「自分が裏切者じゃないって証拠でもあんのか！ あんなら出してしろよ！」

「わたしは……」

「一人だけ被害者ヅラしやがって、何様だってんだよ！ みんな同じ気持ちなんだよ！ 一人で喚いてんじゃないやねえよ！ それで自分が裏切者だったりしてなあ？ そんな風にすれば怪しまれないとでも思ってるよ！」

アライが手のひらに顔を埋めながら、ぶるぶる首を振った。何か喋ろうとしているのだが、嗚咽に紛れて言葉が聞き取れない。ひつくひつくとしやくりあげる音だけが通路に反響する。ログはそれを見て一瞬だけ怯んだようだったが、もはや引き下がれないのか、さらに続けた。

「どうなんだよっ！」

「な、なによ。あんたこそ。仲間を殺したくせに、ぬけぬけと……」

「つせえな、あれしかなかったんだよ！ アルクの声が聞こえなかったのか！ ただ見てただけのくせしやがって、そっちの方がよっぽど非道じゃねえか！」

言葉が拡散する。ログはジュネだけに向けたつもりだったのだろうが、意思に構わず散り散りになって矢のように飛んだ。

ライがぎりっと歯を噛み締めたが、何も言わなかった。アライは嗚咽を漏らすばかり

だ。アイシャは顔を俯けたまま黙っている。なにか諦めたような顔をして。

「やめて……。もう、やめてよお……」

フィリーが悲痛そうに顔を歪めた。ぽろぽろと涙を零している。

「みんな、仲間じゃないの……。なんでこんな、罵りあわなきやいけないの……？　こんなのおかしいよ……」

ジュネが苛立たしげに吐息をついて首を振った。弓を構えたまま、ゆつくりと後ろに下がっていく。もはや仲間の涙も言葉も、彼女には届かないようだった。

「残念だけど、わたしはもうごめんだわ。抜けさせてもらう」

五人。

【裏切者のモノローグ】

どのような表情をしていいかわからなくなると、私の顔の皮膚は、とりあえず笑みの形を浮かべることにしているらしい。鏡の前で、私の顔の皮膚がよく練習をしているのを、私は知っている。私は見ている。

笑顔はとても便利な表情だ。親近感を与えることもできるし、踏み込ませないようブレーキをかけることもできる。何かがそこにあるということを見せかけるには、笑顔が一番わかりやすい。私の顔にとって笑顔というのは、オールマイティになんでも使える、トランプのジョーカーのカードのようなものらしい。

そして私は鏡の中の私の顔を見るたび、その表面をもぎとって、顔にぽっかりと空いた空洞に、腕を捻じ込んでやりたい衝動に駆られる。鏡を見るたび、破壊衝動に駆られる。この顔は本当に私のものなのか。私は本当は、違うのではないか。この顔は本当は私のものではなくて、この声は本当は私のものではなくて、私は鏡の向こうに見えるこの目の奥に埋もれたまま、本当は存在しないのではないか。

かつては孤児だった私も今は、毎日食事を食べることができ、風呂にも入ることができ、風にも雨にも晒されることはない。

みんな親しげな声をかけてくれ、まるで打ち解けた仲間のように私に接してくれる。なのに私の心に開いた巨大な洞穴は広がるばかりで、理由を奪われた私にできる唯一の術は、自分を侵食していく黒い何かから目を反らし、丸くなつてがたがた震えることくらい。

私は懷にナイフを忍ばせている。たまらなくなつたときはそれを取り出し、自分の首へ突きつけることにしている。首にナイフを当てたまま目を閉じる。見えないものは存在しないのだから。私はぎゅうっと目を閉じる。

私の頭は夢想する。やはり私はいないのではないか。この世界で最も不確かなのは私ではないか。私の目は私を見ることができない。鏡を見ることはできるけれども、鏡の中に映る私が、私であるとは思えない。

そうだ私は私の顔を見ることがないのだ。この世界で、ただ一つ、私は私の顔だけは見ることができない。ならば私はいないかもしれない。私は私を騙る肉体と声の奥底に埋もれたまま、永遠に眠り続けるしかないのかもしれない。

愛も絆も感じることはできないのはそのせいか――

目を閉じたまま考える。いつしか眠りに落ちた私の頭がかくりと垂れ、ナイフがすうつと私の首を果実のように貫いて……常にその想像に帰結する。するとほつとして、私は目を開けナイフを収める。焦燥が私の中にあり、井戸の奥から水音がする。

みんな私の目を覗いてはいけない。私の目の中にあるのは暗くて深い井戸なのだ。穢れた私を知られたくない。絆を感じたいがそれができない。笑い合いながら、肩を叩き合いながら、私は頭の中でみんなを殺している。パンパンパンと、パンパンパン。頭が割れていく。

みんな私の目を覗いてはいけない。落ちていく私に近寄ってはいけない。逃げてくれ早く逃げるんだ。私は大変なことをしようとしている。

奴らに渡された毒物は今、はなれの納屋の奥に隠してある。

みんなが街へ出ている間に、私は一人、それを

【本章・第四章】

——通信機の向こう——

ジュネが行ってしまったてから、皆、腰を上げようとはしなかった。

アリイとフィリーの嗚咽の声だけが響いては、その場に沈殿していった。ライはフィリーの手を軽く握りしめたまま、だが慰めるでもなく、思考を放棄したように目を瞑っている。アイシャは魂が抜けたような顔をしながら、衣の帯を手で弄くっている。ログは皆から等分に距離をとったまま、弓に矢をつがえたり点検したりするふりをしていた。ジュネの離反を引き止める者は、もういなかった。度重なる仲間の凄惨な死に、彼らの精神力は疲弊しきっていた。

そして誰も口にはしないが、もはやそうまでして彼女を引き止めたいとは思えなくなっていたのだろう。彼らの瞳の中に微かな疑惑の色が浮かぶのが見えた。それは持っていた無条件の信頼を押しつけて、さあつと瞳を占領する。誰もが誰の瞳も見たくなくて、自分の瞳も見せたくない様子で、顔を俯けたまま床ばかり見つめていた。

声が響いたのは、嗚咽がだんだんと引いていき、静寂の幕が落ちた頃だった。

『みんな！』

喚くようなジュネの声が響き渡った。

『みんな！ 聞こえる！？ みんな！ 副長！』

「通信機だ」

ライが言い、アイシャが衣服のポケットから魔導通信機を取り出した。受話口から声が漏れ出ている。

『聞こえる！？ 助けて……助けて！』

「襲われてるの！？」アイシャが通信機に叫んだ。「今何処にいるの！」

『助けて……。守護人形と、敵が何人か——』

受話口の向こうで、ガシャ、という重々しい足音が響いた。続いて人間の靴音が近づいてくる音。視界の隅で、フィリーが怯えたように辺りを見回した。青ざめた顔をして通信機に聞き入っているライの腕を、ぎゅっと掴む。

『助けてっ』喘ぐような声でジュネが叫んだ。『守護人形が』

「何処なの！ 今何処にいるの！」

ざくり、と小気味良い音が聞こえた。一瞬遅れて、ジュネがひいっと叫ぶ声。がんと何かが床にぶつかる音。誰かのあげる楽しそうな笑い声が、雑音のように合い間に響く。

『助け——』

声は途切れ、リングを砕くような音の中に飲み込まれた。

ぐわん、と空間が捻れるような低い振動音が響く。合間に、びちゃ、と何か柔らかいものが落ちる音。くすくすと誰かが笑う声。

もう一度、剣が振り下ろされたようだった。ずしんと腹に響く低い音。守護人形の、巨大な剣。斬るというより叩き潰すといった方が正確な——

『頭が陥没。ピーナツみたい』

突然音が近くなり、場違いに楽しげな声が響いた。あの法術士の女の声だ。

『みんな、ダメじゃない。いくらうざいからって、一人で放り出しちゃ。おかげで脳味噌はみだしちゃったじゃない！ これ以上バカになったらどうしてくれるのよ！』くすくすと笑いながら、声は続ける。

アイシャの手が力を失い、通信機が落ちて床に転がった。

『わたしが裏切者じゃなかったって、わかりましたかー？ 裏切者はまだそこにいるのー。それなのに疑ってー酷いんだからもう。一人でも犠牲になってほしくないんじゃないのかったのー？ でも仕方ないか、被害者ヅラした五月蠅い女だしー私って。ぐちゃぐちゃに潰れちゃって、みんな満足でしょー？ 嬉しいでしょー？』

フリーが頭を沈め、床に吐瀉物を吐き出した。ライは真っ白な顔をして、石になってしまったように固まっている。アライは両手で耳を塞いだまま激しく首を振っている。ログが立ち上がり、呆然と通信機を見つめているアイシャの横に立った。

『さて、じゃあ仲間が気になるみんなのために、わたしの死体の状況をお知らせするねー。なんとね、まず胴が両断！ おなかから二つに分かれて、内臓がいろいろはみ出しちゃってるのー。それから、頭。こっ——』

踏み出されたログの足の下で、通信機が砕けた。

六人。

——持ち物検査——

「……通信機を出して」

黙りこくっていた沈黙を破り、アイシャはそれだけ呟いた。

言葉が通じなくなってしまったように、皆、反応しなかった。ログだけがちらりとアイシャの顔を盗み見たが、すぐにまた弓の手入れに戻った。続いて懷から短剣を取り出し、布で磨き始める。

「みんな、通信機を出して」

アイシャがもう一度言った。

「……どういふことすか、副長」

ログの問いに、しかしアイシャは答えない。

ログは答えを察しているようだったが、あえて問いただすその口調には、どこか捨て鉢な響きが感じられた。

「……どういふことすか」

「誰かがこちらの会話と座標を向こうに伝えている、ということよ」

口調は冷静に、アイシャは言った。静かな、だが何かを諦めてしまったような声音だった。

「そう考えれば、待ち伏せの説明も、一人になったところを都合良く襲撃されたことの説明もつきます」

「偵察に聞かれた、とかの可能性を考えはしないわけすか。あくまで仲間の中に裏切者がいると」

「やめてえ……」

アライが耳を塞いで首を振った。構わず、アイシャは続けた。

『「一人でも犠牲になつてほしくない」……リーダーが口にしたことを、あの法術士は知っていました。でもリーダーがこの言葉を言ったのは、城に入る前、あの丘の上のことです。偵察がいたとは考えられない」

「……いたかもしれないじゃないすか」

『裏切者がまだこの中にいる』とも言っていました。私達が裏切者の話を口にしていたのは、この中でのことです。一度ならず何度も、偵察がそう都合良くうろついていると思えません。いるとしたらわからないわけがない。わからないとしたら、その者が仲間

の中にいる場合、だけ」

さっと視線を巡らし、アイシャは言った。

「誰かのポケットの中で、通信機が作動しているとは思えません」

お互いがお互いへ視線を向けた。

絡めとるような視線の中で、まずアリエが取り出した。ひくひくと掠れた嗚咽をあげながら服の裏から魔導通信機を取り出すと、放り出すように床の上に転がした。

続いて、ライが腰のベルトに装着していた通信機を取り外し、床に置いた。彼に促されるようにして、フリーもポーチから通信機を取り出す。

並べられた通信機を、アイシャがさっと見渡した。特に不審な点はなかったらしく、ふう、と息をついて顔を上げる。もちろん取り出すときに見えないように証拠を消し去った、という可能性も考えなければならぬのだが、彼女はそこまでは言わなかった。アイシャはログの方へ顔を向けた。

ログが大仰に肩を竦めてみせながら、苦笑を浮かべた。酷く作り物めいた表情だ。

「オレ、通信機持つてこなかったんすよ。邪魔だから」

「……そう」

「なんなら身体検査でもしますかね。服の下に隠してるかもしれないし。脱ぎましょうか、それとも脱がせてくれっかな？ 副長に脱がされるならオレも本望なんだがなあ」

「やめて」

ログは再び肩を竦めた。壁によりかかり、だらりと足を投げ出す。わざわざ反感を買うような真似をするのは捨て鉢か、それとも自ら疑念を被って仲間の絆を保とうとする無意識なのか。本人もわかつてはいないだろうが。

「……副長の通信機については、もうわからないっすね」

「ええ。私は裏切者ではないけど、それを信じてもらうことは、もうできないわね」

「残念だな。オレ、副長好きだったのに」

掠れた笑い声をあげながらログが言ったが、アイシャは構わなかった。立ち上がるが、仲間達は俯いて黙り込んだまま、腰を上げようとしていない。

「みんな、行きましょう」

呼びかけるその声も、もはや含まれるのは空々しさばかりだ。

通路の先で確かにジュネが死んでいるのを見つけたときも、彼らはもう涙も悲しみも感じなくなってしまったように、淡々と検分しただけだった。

【ヨムズ村 村長の息子の日記】

明け方、久しぶりに雨が降った。このところ日照りが続いていたので恵みの雨となった。稲の方も息を吹き返す。秋ぐちにはなんとか収穫できるかもしれない。

朝方に闇ノ目のボスから、また確認の連絡が入った。いい加減しつこいので辟易した。最後通牒をするので村長に代われというので代わったが、義父はやはり拒否の一点張りだったようだ。

村の付近にあんな奴らを住まわせるわけにはいかん、と義父は言う。付近の土地や小城の所有権を巡っての闇ノ目との対立に、義父は頑固に立ち向かっている。村民の中には、闇ノ目の黒い噂を恐れ、歩み寄った方がいいのではないかという意見もあった。だがそんなわけにはいかん、正々堂々戦うべきだ、と昔気質の義父は譲らなかった。

昼過ぎに、今度は街から連絡があった。街へ出稼ぎに行っているあの子達からだ。今年はやや作物の生長が良くないということで、皆でトーエンハイムへ短期の仕事に出た。

通信機からはアイシャの声。みんな元気で働いてるから心配しないで、トーエンハイムでの実入りはなかなかだから期待しててください、明日になったら帰ります、と。

劳いの言葉をかけてやるつもりだったのに、思わず言葉が詰まってしまった。本当にみんな、良い子達だ。孤児院で泣きつかれたときはどうしたものかと思ったが、全員引き取って本当に良かった。あんなに仲の良い彼らを引き裂くことなど、一体どうしてできるだろうか。

今や私は、あの子たちを本当の子供のように思っている。いや、子供というよりも、歳の離れたきょうだいのように。彼らの姿を見守ることが、今の私の生き甲斐なのだ。彼らなら、どんなにつらいことがあっても乗り越えていけるだろう。皆しっかりしているから心配はないだろう。どうかこれからも仲良くいてほしい。小さな花を持って笑

ったあの頃のように。

追記。

ちやっかり者が一人帰ってきているようだ。なんだか酷く強張った顔をして、外をうろろやっているのを見た。体調が悪くなつて戻ってきたのだろうか。それともホームシックにでもかかったのかもしれない。

あの子は生まれつき身体が弱く、皆と同じように仕事をする事ができない。一緒に出稼ぎに行くと言うから行かせたものの、色々思い悩むことでもあるのかもしれない。もともと神経の繊細な子なのだ。気を配ってやらなければいけない。

作業を済ませたら、街へ送りがてら、皆に飯でもご馳走してやろう。どうせ彼らの出稼ぎ先に、挨拶をしてこようと思っていたことだし。

追記2。

はなれの納屋から、あの子が出てくるのを見かけた。

農薬や工具などが保管しており、普段は人の立ち入らないところだ。鍵をかけ忘れたのに気づいて戻ってみたら、ちょうどあの子が出てくる場所だった。

何をしていたのだろう。幽霊のように色の抜け落ちた表情をしていた。私が見ていることに気付くと、さっと身を翻して逃げ出してしまった。どうしたのだろう。何故あんな顔をするのだろう……。

【本章・第五章】

——作戦——

一行の足取りは重かった。

先頭を行くのはアイシャである。本来なら前衛であるライが就くべきポジションなのだろうが、背中を見せるのを嫌ったのだろう、彼は前へ出ようとはしなかった。フリーと寄り添うように……いや、彼女を他の仲間から覆い隠すようにしながら、ずっと後ろの方を歩いている。

アイシャは彼に、前に出るように言いはしなかった。それを言えしななければ、彼が仲間を警戒しているという事実を、そっと埋めて隠してしまえるのだとでもいうように。背中に信頼の証を描いて後ろに行く仲間達に呼びかける風を装いながら、しかし進んで先頭を行く彼女の姿は、やはりどこか何かを諦めたようにしか見えなかった。

アイシャの後ろには、アライとログが並んで歩いている。互いに相手に近い方の半身だけ、熱くなっているのが見えるようだ。彼らはそれを必死に抑え、表そうとはしていない。だが滲み出た警戒心が空気に漏れ出し、ちりちりと電気を帯びてあたりに漂っているのだ。

誰も言葉を発しなかった。

無機質な足音だけが通路に木霊し、やがて大きな部屋へ抜け出た。

眼前、部屋の真ん中には、大きな壁が仕切りのように立っている。首を上げると、上の方に柵があり、その向こうが広間になっているのがわかる。

壁の左右には部屋の周囲を取り囲むように、階段がぐるりと伸びている。回りこみながら上がっていく、上の広間へと出る造りになっているのだ。

アイシャが左の道を選び、ゆっくりと階段を昇っていった。後ろにアライとログが続いた。随分遅れてライとフリーが、ゆっくりと部屋を横断する。赤い絨毯に足音は吸い込まれ、歩いていく彼らはまるで生ける屍のようにすら見える。

アイシャが折れ曲がった階段の踊り場に、もう少しまで辿り着くというとき。

後ろを歩いていたアライが、突然背後からアイシャの服を引っ掴んだ。

叫び声を上げながらアイシャが振り払うと、そのままアライは階段の上へうつ伏せに倒れた。

振り返ったアイシャの瞳に認識の光が宿る頃には、彼女を押しつけてログが階段を駆け上がった。慌ててアイシャも後を追う。

しゅつ、と風を切る音がしたかと思うと、アリーの背に二本目の矢が突き立った。エビのように身体を反らせるアリーの、さらに矢が飛ぶ。突き立った。

階段の上に倒れた彼女は、さながら放り出された人形のように。身体が力を失い階段の上をずりずりと落ちると、水気のないモップで拭いたようなドス黒い跡が残った。

部屋の左階段の踊り場。太い柱の陰に駆け込み、アイシャとログは身を潜めた。

その階段を昇った先に、弓を構えた男と法術士の女が姿を現していた。

弓を構えた男が、ふんふんと鼻歌を歌いながら、さらに何本か矢を撃った。すべてアリーの背に突き刺さり、白い着衣に真っ赤な水玉模様が浮き出た。じわじわと滲みながら広がっていく。

すっかり一面深紅に染まってしまいうまで、男は矢を射続けた。

「美しい」

弓を構えた手を下ろしながら、感極まったように男が言った。

「人の死ほど心そそられる芸術作品はないものだ。そう思わないかね。今まで動いていたものが、一瞬後には小刻みに痙攣しているその様。意思を持っていた瞳が、霞んで白くなるその瞬間。人を最も美しく飾り立てるのは、赤黒い己の血の色だ。そうは思わないかね君たち！」

「思わねえよ……」

柱の陰に身を隠しながら、ログがぼそりと呟いた。独り言のような呟きが、階段上の男のところまで聞こえるはずもない。男は嬉々とした様子で自説を披露し続けている。

アイシャが顔を巡らせたのを見やり、ログは親指を立てて、眼下に伸びた通路の向こう、もう一方の階段の方を示した。ライとフィリーが、跳ねるように段を駆け上がったいくのが見える。距離をとって後ろの方を歩いていたためだろう、矢が飛んできたとき咄嗟に方向転換し、右の階段を選んだのだ。

折れ曲がった階段を駆け上がる二人に、男は目もくれていない。朗々と通る声で演説を続けている。法術士の女が首を振り向けたが、特に何をするでもなく、じつと見つめているだけだ。二人は階段を昇りきる。広間の端と端の距離を挟んで、男達と直線に並んだ。

ライはちらっと男達に視線を走らせたが、すぐに広間向こうの扉の方へともぎ離れた。

フリーの手を掴み、引き摺るようにして駆けていく。パンツ、と大きな音を立てて扉を開け放つと、そのまま足音も高く走っていった。

法術士がくすくす、と笑うのが、男の演説の合間に聞こえた。

「あーあー……行っちゃった……」

柱から注意深く顔を出して様子を見ていたログが、疲れたような笑みを浮かべた。

「見捨てられちゃった……ってことか」

「制御室に行ってくれたのよ。私達のために」

アイシャの言葉に、ログは更に笑みを濃くした。

「副長、動転しすぎて判断力鈍ったんじゃないの？」

「そうだとしたら、鈍ったままでいたいものね」

アイシャは一つ吐息をつく、顔を引き締めてログを見やった。

「さて、どうしようかしら」

「どうしようと言われてもな。魔法は？」

「届かない。憎らしくなるほど防衛側優位の設計になってるわ。走って射程範囲まで駆け寄っても、まあ詠唱中に矢で滅多刺しね」

「といって弓勝負じゃな……」

ログはちらと法術士の方へ視線を向けた。

「法術の使い手が向こうにいる以上、一撃で殺らないと無意味だ。辛いぜ……」

「白兵戦用の武器はある？」

「あるけどよ。でも無理だぜ。確かに近距離戦ならこっちに分があるだろうけどよ、接敵する前に殺られちま——」

ログがぱちりと目をしばたいた。

「そうか、と小さく呟く。」

「……手があった」

「……………」

「“透化”だ。姿を消して近づけば……」

「近づいてる最中に“解呪”されたら終わりだわ……」

“透化”を破られて蜂の巣にされたディセム。その凄惨な死の光景を思い出したのか、陰鬱な顔で首を振った。

「……やっぱり駄目よ。危険すぎる」

「なら他に方法でもあるってのかよ」

「それは……」

「奴らの気を引きつけておいてくれ」

ログは言うど、懷から短剣を取り出した。柱を背に、ちらと後ろを盗み見て男達の様子を伺う。後方から射す視線から背中を覆い隠すように、胸の前で短剣を捧げ持った。

「オレが奴らの背後にまわるまで、オレがいなくなってることに気付かれちゃまずいんだ。あの法術士がこっちの意図に気付いたら終わりだ。階段の途中で『透化』を破られたら、どうしようもない」

「……………」

「だから奴らの意識を反らしておいてほしい。オレが上に着くまでの間だけでいい。奴らの注意を引きつけておいてほしいんだ。……頼めるか？」

アイシャがふう、と苛立たしげな吐息をついた。

じっと見つめるログの瞳を、強い視線で跳ね返す。

「頼めるか、ですって？」

「……………」

「何、その言い方。今更」

「……すまね。ムシが良かったな。いや、行ってくるよ。多分一人でも——」

「任せる、でいいでしょ」

「……………」

目を上げたログを一瞥すると、アイシャは眼鏡を外し、床に落として足で踏み碎いた。

啞然とした顔で見やっっているログに、ふてぶてしい笑みを返して寄越す。

「仲間でしょ、私達。何を今更、頼めるか？ よ。冗談じゃない」

「……………」

「あんたの仲間を信頼しなさい。自己陶醉男となりきり法術士程度、どうとでもするわよ。それよりあんたは手足の震えをどうにかする。途中で転んだり武器落したりしたら、タマ潰すわよ」

言って、バシッとログの尻を叩く。

ログは呆けたように叩かれた尻を撫でさすりながら、アイシャを見つめた。

「ん？ ……何、じっと見て」

「いや……」ログはようやくといった感じで笑みを浮かべながら、床を指した。「……そ

の眼鏡、人格抑制装置でしょ」

「私、もとからこうだけど」

「……マジかよ」

「外ヅラと中身が全然違う詐欺、ってリーダーに言われた。以前ちよつとだけ付き合ってたのよね。すぐに終わっちゃったけど」

「……知らなかった」

「小さいときからいい子ちゃんやってたら、キャラ覆す機会なくしちゃってね。孤児院でも村でも、あんた達がみんなガキっぽくて迷惑かけるから、あたしがしっかりしなきゃと思ってたの。まあ知的な副長って役どころも、格好良くて好きではあるんだけど」

「オレたち、ずっと騙されてたってワケ？」

「仲間だろうとなんだだろうと、知らせないことはあるし、騙すときや騙すもんよ」

「……裏切りモン」

アイシヤは大仰に肩を竦めた。

「いいから、深呼吸して気を落ち着けて。勝負は一回きりだからね。あんたがミスったら二人まとめて死亡。私の命預けるんだから心してかかりなさいよ。二人揃って、生き残るの」

「あ、ああ……」

「どもつてる場合じゃない。少し待つから、気を落ち着けなさい」

「……あのさ」

「はい？」

「成功したらデートするって約束してくれれば、緊張とれそうなんだけど」

「……そんだけ軽口きけるなら大丈夫。これの針が真上に来たら開始。検討を祈るわ」

「了解」

「デートは、生きて帰ってから」

「……了解」

ログは吐息を噛み殺すように口を開け閉めすると、短剣を構えた。幾分緊張が解れたのか、手足の震えも収まっている。だがちりちりと漂う張り詰めた気配は明確であり、彼はそれを鎮めるように瞑目して深く息を吸った。

アイシヤはログにくると背を向け、柱の陰から男達の方を伺う。

うんとそばに顔を近付けなければわからないような小さな音で。彼女の歯がカチカチ

と震えて鳴っていることに、ログは気付かない。カチカチカチ、カチカチカチ。ごくりと唾を呑み込む音とともに、華奢な喉元が隆起する。

七人。

——お芝居——

男は左肩にバイオリンを乗せて、場違いに牧歌的な曲を演奏していた。

浸るように目を瞑ってみせてはいるものの、気配が蜘蛛の糸のように張り巡らされ、空気の乱れをじいっと監視している。早くこちらへ来ないかと、てぐすねひいて待っているのだ。『透化』をしても、気配でわかるというのだろう。男はくすりと余裕たつぷりの笑みを浮かべ、そのまま機械的に演奏を続けた。

弓は男の足元へ立てかけられていた。すぐにでも手にして矢をつがえることができるよう、計算された置かれ方だ。

「ねえ！」

眼下、階段を下ったところの広い踊り場。柱の陰から、アイシャの声が響いた。

「ちよつと、撃たないでくれる？」

男は返事をせず、バイオリンを演奏し続けた。傍らに立った法術士も反応を返さない。

ややあつて、柱の陰からアイシャが顔を出すのが見えた。おそろおそろといった様子で身体を乗り出し、男が弓を取らないことを吟味するような間を空けてから、二、三歩進み出る。

顔色は青ざめているが、口もととはきゅつと結ばれている。引かれるような視線を柱の陰に向けてから、彼女は男を仰ぎ見た。

「取引を、しない？」

野太く響かせようとして、失敗したような声だった。語尾が震えて、裏返っている。

男はようやく演奏を止めた。

その口から微かに笑い声が漏れたが、アイシャの元までは届かなかったろう。

「……取引？」

「そう。私達を見逃してくれたら、そっちの条件を呑むわ。なんでも！」

「それはおもしろい提案ね……」

法術士の女がくすくすと笑った。

「でもわたし達の望みって、あなた達で楽しむことだし。無理よ。それとも仲間でも売ってくれるの？」

「私を見逃してくれるならね」

アイシヤは挑戦的とも言える笑みを浮かべた。だが表情に相違して、追い詰められたネズミが虚勢を張っているかのような印象を受ける。

はあっと大きく吐息をつく、彼女は大仰に肩を竦めた。虚勢——いや、虚勢の中に紛れさせ、つくりものの言葉であることを、誰かに訴えかけているように。

「人間、自分の命が一番大事なものよ。私を助けてくれるなら、先に行った仲間を呼び戻すくらいするわ」

「あらあら、悪い人」

法術士が面白そうにくすくす笑った。それを見やったアイシヤの頬が微かに緩む。張り詰めた緊張が安堵に緩んだように、見える。

アイシヤは肩を竦め、仲間達誰も聞いたことのないような、軽薄な声を出して寄越した。

「取引成立？」

「どうしようかな。別にあなた達の協力なんてなくても、残った人達くらい殺せるし」

「被害は出るわよ。ライもフリーも、あれでやり手だし。ライは聖騎士の称号も持つてくるくらいだから。でも私達がうまくやれば、被害ゼロで済む」

「みんな被害は気にしないんだけど……そうね、そこまで言うなら……」
と、法術士は柱の方を指差した。

「もう一人を殺しなさい。一人だけなら、いいわ、見逃してあげる」
「……………」

アイシヤがごくりと息を飲むのが見えた。法術士がくすくすと笑う。男がバイオリンを置き、弓を手にとった。緩慢な動作で矢をつがえると、アイシヤへ向ける。

「さあ、早く殺したまえ」

アイシヤの視線が斜め後ろ——柱の裏へと向けられた。その視線はほんの一瞬だけ、迷うように階段の上へぶれていたのだが、男達は気付かない様子だった。柱の裏と男達の間で、迷うように視線が往復する。旋回する視線が一瞬だけ階段を捉えているはずだ

が、もちろん誰の姿も見えない。

「隠れてるのも出てきなさい。二人のうち一人だけ助けてあげる。ほら、早く！ 殺し合ってよ！」

「自分の命のために仲間で殺し合い……。いいね、とても美しい」

法術士のはしゃいだ声に、男のそれが重なった。

アイシヤは睨みつけるように、柱の裏へと目を向けている。上からは見えないその位置の誰かと、視線で何かをやりとりしているように。ぎ、とその歯が噛み締められた。身体がぶるぶると小刻みに震えるのがわかる。

「ほら、早くー！」

アイシヤのそんな様子を心底楽しそうに見やりながら、法術士がまた叫んだ。

「ねえー！ 聞こえないんですかあー！？」

反応はない。

法術士が笑みを引つ込め、すっと目を細めた。

「だめ！」

アイシヤが叫んだ。ぶんと首を振り、柱の方へ、静止させるように力なく手を上げた。睨みつけていた目が、今にも泣きそうなものへと変わった。ぶるぶると震えていた足が、へなへなと力を失ってその場に座り込む。ぎりぎりに拮抗していた二つのものがバランスを崩し、一方へすべてが流れ込んでいったかのように。

「だめ……やめて、いいの」

人形のようにぶるぶると首を振りながら。震え、掠れた声は抑えられたものだ。だがそれは嵐の前で風いだ海のようにで、予兆のようなものがぴりぴりと空気に火花をあげる。

「そこにいて……いいから任せて！」

胸の奥に詰まった何かが、言葉とともに徐々に流れ出していくように。

法術士の視線が、ねつとりと彼女に絡みつく。

「……いいの、いいから！ お願ひ……。……大丈夫だからああああっ！！」

両手でぎゅつと耳を覆うと、俯き、いやいやするように彼女は激しく首を振った。こちらまでは届かない小さな声を、冷徹な現実を、半狂乱になつて振り払うように。

そのまま彼女は、肩を震わせて泣き始めた。誰も喋らない部屋の中を、彼女の鳴咽の声だけが漂う。壁際で、靴が石床を踏みしめる音がした。泣き声の中に埋もれ、ごく微かに、だが。

やがて、男が肩を竦めた。

「なんだ……そういうこと、か」

「……………」

スイッチを切り替えたようにアイシャの鳴咽が引いた。俯いたままのその表情は伺えないが、全身が耳になって言葉を聞いているのがわかる。

男は興が削がれたように大きな吐息をついた。弓を構えたまま——滑るようにその顔が横へと向けられる。

法術士が肩を竦めながら頷き返した。

男はまた吐息をつきながら、アイシャを見下ろした。

「なんだかんだ言っても結局、仲間は殺せないってことだろ。つまらないな」

「……………」

「交渉は決裂だ。死にたまえ」

アイシャが顔を上げた。その目に涙は見えない。視線が衝撃波のように階段の下から上まで駆け上がった。もちろん誰の姿もない。

へたりこんだ彼女の全身が、ぶるぶると震えた。

きりりつ、と男が弓をしならせた。

「最後に……一つ訊かせて」

俯いたまま、静かな声でアイシャが言った。

「裏切者って、誰なの……？」

「そいつだよ。今、背中から君に矢を向けている」

アイシャがバツと顔を振り向けるのを見て、男がくくく、と喉の隙間から漏れるような笑い声をあげた。

アイシャの後ろには誰もいない。

「なあに？ まだわかってなかったの？」

一緒になつてくすくす笑いながら、法術士が言った。

「姿を消したのが、いたでしょう？ “透化”を使って」

「……………」

アイシャがぐくりと息を飲むのが見えた。視線が階段を駆け上がり、宙を見据える。極限にまで達した緊張の中で、彼女の思考が混乱しているのが見てとれる。そこにある見えない何かを見透かそうとするかのように、じいっと。

「十字路だよ。ご紹介してあげようか？」

法術士の言葉にアイシャの瞳がハッと瞬いた。慌てて視線をもぎ離す。だが既にそのときには彼女の視線につられるように、男が後ろを向いていた。

誰かが息を呑む小さな音が、誰もいないはずの宙から大きく響いた。

「――“解呪”！」

法術士が叫んだ。周囲一体の空間が輝き、消えている者がその場に燻りだされる。短剣を振り上げ、今まさに男に踊りかかろうとしていたログ。

咄嗟に男が身体の前で弓を掲げたときには、ログはもう距離を縮めていた。左手で弓を掴むと荒々しくもぎ取り、そのまま階下へ放り捨てる。合間に法術士の間延びした声。振りかぶられた短剣が、男の左肩から右の脇腹へ、さらに左の脇腹へと一気に切り裂いた。

血が勢いよく噴き出す中、ログは身体を反転させる。

振り返った法術士がログの姿を捉え、目を見開いた。

ひつ、と詰まったような悲鳴が漏れ、半ば自動的に、操られるように手を掲げた。口が開く。法術の祝詞。

「うおおっ」

横に一闪、短剣が薙ぐ。刃が首を切り抜くさまというのは、まるで柔らかい果物を半分に切り分けるようだ。途中で骨に当たったのか首の半分の深さも切れはしなかったが、パクリと大きな口が法術士の首に生まれ、赤い唾液をぼたぼた垂らす。

ログは短剣を振り切った姿勢のまま、荒い吐息を一つついた。刃を振るって血を飛ばすと、階下のアイシャに顔を向ける。

やったぞという印なのか手を挙げかけ――

気配に振り向くと同時に横っ面を殴りつけられるログ。手から短剣が抜け落ちた。

男が、バイオリンをぶら下げて立っている。白いその服はV字に裂け、胸から腹まで、自分の身体から流れた血で真っ赤に着色されている。だが傷口はうつすらとしか残っていない。法術士の“祝福”が間に合ったらしい。

「逃げて！」

階下でアイシャが叫んだ。足に力が入らないのか、へたりこんだままもがくように手を振り回している。

だが脳震盪でも起こしたのだろう、ログは屈みこんで頭を抑えたまま動かなかった。

男がにじり寄り、バイオリンを掲げた。

「こおの……クソがつ!!」

バイオリンの裏面が、ログの後頭部に振り下ろされた。ガン、と鈍い音とともに、ログの頭がぐんと揺れる。

静止画のような一瞬の後、そのままログは前のめりに倒れた。頭とバイオリンの間に挟み込まれていた指の何本かが、奇妙な角度で内側に曲がっている。

ログの腕がひくひくと動き、後頭部を守るように掲げられた。アルマジロのように身体を丸める。

「助けて!!」

アイシヤが叫んだ。

男がまたバイオリンを掲げた。

「芸術家に血を流させるんじゃねえよこの……クソが!!」

掲げられた手ごと、バイオリンがログの後頭部を打った。まるでそういった動きをする玩具のように、ログの身体がびくびくつとたたうった。

「動いて! ねえ!!」

アイシヤが叫ぶ。必死に呼びかけるその声は震えている。聞こえた風もなく、男はバイオリンを振り上げる。

「この……こおのクソガキがつ!!」

グシヤ、と奇妙な音とともに、ログの手の形が潰れてひしゃげた。甲が陥没し、指が思い思い好き勝手な方向を向いている。身体がびくびくと細かく痙攣している。白目を剥き、口から白い泡を吹いている。

「お願い止めてえ!!」

「美しいものがわからない奴は、なっ! 死ぬべき! なんだよっ!! クソが! この……馬あ……鹿ッ!!」

打ち付けられるたびにバイオリンの弦が振動し、ビーン、と透きとおった重低音を奏でる。ガン、と頭を叩く鈍い音と、指と手の甲の骨が碎ける音と。三重の珍妙なアンサンブルが、広間に流れるように響き渡っていく。

男の足が乱暴にログの手をどかした。血に濡れた彼の後頭部が、無防備に男の前に晒される。男がバイオリンを振り上げた。

バイオリンの柄がへし折れると同時に、ログの頭がべこりと陥没した。頭の下で、と

ろりとした血が広がっていく。

アイシャが吠えるような声をあげるのが聞こえた。宙空に生じた何本もの炎の矢が、吸い込まれるように男へ降り注ぐ。

柄を持ったままの男の腕が、あつという間に炭化した。目を見開いた男の顔に被さるように、さらに幾本もの炎の矢が直撃していった。轟音とともに燃え上がり、男の身体が炎上する。キャンプファイヤーのように盛大な炎。

アイシャが荒く息をつく音が響いた。階上を睨みつけるその瞳から、ぼろぼろと悔しそうな涙が溢れ出る。くしゃつと歪んだ口から漏れる嗚咽。彼女はしゃくりあげながら泣く。

「この……。裏切者……お」

その首に、ぶすりと矢が一本、突き刺さった。操り人形の糸が切れたように、ゆっくりと彼女の身体が崩れ落ちる。

男がすっかり黒焦げになって、床に崩れ落ちるのと同じだった。

九人。

【ヨムズ村 村長の息子の日記】

今日は朝からライがやってきた。

相談があると深刻な顔をして言っていたので、なんだろうと気を引き締めて待っていたのだが、やってきたライが開口一番口にしたのは、フィリーに告白をしたいのだからどうすればいいだろう、という恋の悩みだった。

なんて言ったらいいのかな、と頭を掻きながら照れくさそうに言うライ。そんな風になっていると、昔から全く変わっていないようで、私はなんだかおかしかった。

元々、結構な泣き虫だった子だ。身体の弱いノブルの次に、心配をかけさせる子だった。孤児院に引き取りに行ったときも、誰より大きい声でわあわあ泣いていたものだ。小さな花を渡してあやしてやっても、なかなか泣き止んでくれなかったのを覚えている。

今ではすっかり、ジャンクやアイシャと並んで、みんなを引っ張る位置についている。昔は戦闘などとてもできそうではなかったのに、いつの間にか、王都でも有数の使い手に数えられるまでになっていた。

いつからか頼りになるようになったのは、人を好きになるということを知ったからなのだろうか。

人を想う気持ちというのは、人を何倍にも強くする。それは人間にとってなくてはならない、何物にも代えがたい大切なものだ。

私が秘伝の口説き文句を伝授してやると、ライはくすくす笑って、おじさん、柄じゃないですよ、と言った。大きなお世話だ。

もう一つ、悩みごとがあるとライは言う、今度こそ深刻な顔をした。どうやら本題はこちらの方だと察し、話に耳を傾けた。

ライが心配していたのは、ノブルのことだった。ノブルが元気が無いんだ、心配だと、ライは我がことのように顔を暗くした。

もともとノブルは身体が弱く、昔から今ひとつ何を考えているかわからない子だった。他の子のように無邪気さがなく、あまり懷いてもくれなかった。自分のことを話さないし、仲間内で悩みなどを打ち明けたりもしていない。ライや他の仲間のように、歳相応に恋のことにも興味が無い様子。が、あの日以来とくに元気が無かった。いや、元気が無いというよりも、人間として動いていた時が、そこで止まってしまったように。

もちろん、シヨックなのは理解できる。あの日のことは、私の記憶の底にも鮮やかに焼きついたまま消えていない。皆も気持ちの差こそあれ、同様だろう。だが彼らはもう悲しむ時を終え、過去に蹴りをつけて前に踏み出そうとしているのに、ノブル一人がその時に留まったまま、一向に進めていないように思う。

皆の輪から一人ぼつんと距離を置いて、周囲に誰もいないか伺うようにしているのを何度か見かけた。その表情があまりに険しかったので、どうしたんだと声をかけたこともあったが、ノブルはびくりしたように目を開いてこちらを見たまま、なんでもありませんと言うだけだった。あの日以来、ノブルは私を避けている。そのくせ陰からじつと監視するような、暗い気配を感じる。あの日以来……納屋で鉢合わせして以来……。

一体どうしちゃったんだろう、とライが言う。心配になって悩みを訊いてみたらしいが、みんなには言えないよ、と返されてしまったらしい。どうして一人で抱え込むんだよ、とライは齒痒そうだ。相談してくれればいいのに、おれたち仲間なのに、と。

だが、他人に言えない悩みというものもある。例えそれが仲間であつたとしても、いや大切な仲間であるからこそ、知られたくない心の隙間を、隠しておきたいと思うのかもしれない。それを無理に訊き出すことは、できないものだし、してはいけない。すべてを共有することはできないんだ。人は最終的には、みな一人なのだから。

私がそう言うと、ライは頷き、だがまだ悔しそうだった。あいつ、苦しそうに見えるんだ、とぼつりと言った。一人で抱え込んで何も言わないまま、壊れちゃいそうに見えるんだ。なのに助けになれないなんて、悔しいじゃないか、仲間なのに、と。

私はライのそんな様子を見ながら、目頭がわずかに熱くなるのを感じた。

人はみな、一人ぼっちだ。広い世界の中で、自分という存在を真にわかることができないのは、自分しかない。人は孤独だ。

だがだからこそ恋人を想い、友を想い、仲間を想う。

そうして一瞬でも誰かと心を繋げる時こそ、人にとって一番大切な時なのだと。そのことを気付かせてくれたのは、この子達なのかもしれない。

【本章・第六章】

——玉座の間——

ライは魔法士の首に剣先を突きつけたまま、動けずにいるようだった。彼の足元ではローブを纏った魔法士の少年がうつ伏せに倒れ、幼子のように丸まって、腕で自分を庇っている。

玉座の脇に立った女の声が響く。

「聞こえなかった？ 剣を捨てろって言うてんの」

女は、右手にボウガンを、左手に革の鞭を携えていた。構えたボウガンの先にはファイリーが立っていて、女を睨みつけている。ライ達とも女とも、ちょうど等距離の位置。二人、一人、一人で三角形を形作っている格好だ。

「囧か……」

ライが忌々しげに、足元の魔法士を見下ろした。ローブの裾を踏みつけられて、魔法士は逃げるできないようだ。詠唱をしようと言葉を発した瞬間、首筋に突きつけられた剣が彼を殺すことは間違いない。

ライが女へ、続けてファイリーへと視線を向けた。距離を目測しているのだろう。だが跳びかかって右手を斬りつけるにしろ、矢の軌跡上に身体を割り込ませるにしろ、距離が空きすぎているのは明らかだ。ボウガンの引き金が引かれる方が早い。

ライが歯噛みした。

「……距離を空けさせるために、こいつだけ先に出てきたんだな……」

「そ。ったくベタベタひつついちやって。うぜえから引き離したの。さあ」ボウガンの引き金にかけた指先を跳ねるように動かしながら、女。「……剣を捨てな」

「……彼女を撃ったら、こいつも死ぬぞ」

ライが、突きつけていた剣を微かに深く下ろしてみせた。刃の冷たさを肌に感じたのか、魔法士がひいつ、と掠れた悲鳴をあげる。

「……ボウガンを下ろせ」

「はあああ？ 何言ってるの？」

「先にボウガンを下ろせ。そうすれば、俺も剣を引く」

「あああ……なんか勘違いしてるようだねえ」

「こいつがどうなっても——」

カシュン、と金属の音が響き、宙を矢が走った。

フィリーもライも、反射的に自分の身体を庇っていた。

わあっ、と悲鳴をあげたのは魔法士だった。ローブを袂り、肩口に矢が食い込んでいく。

「別にそいつがどうなろうと、どおでもいいの。あんたらみたいに友情ごつことか愛情ごつことか、興味ないし」

絶句したライにやりと笑ってみせてから、女は再びフィリーにボウガンに向けた。

通常、ボウガンに矢を番えるには結構な時間を必要とするのだが、女が手にしているのは二連射式の改造ボウガンだ。

「さあ、剣を捨てな。ま、彼女の額に穴が開いてもいいなら、持っててもいいけど？」

「……………」

「外すんじゃないかと期待してる？ この距離だったら外さないと思うけど、ま、そう思うなら懸けてみるのもいいんじゃない？ 駄目だったら彼女が死ぬってだけの話なんだし」

「く……」

ライがぎりぎり歯を噛み締めた。震える手の振動が剣に伝わり、魔法士が喉から搾り出すような悲鳴をあげた。

女は軽く肩を竦めると、嘲るような目をライに向けた。

「結局できないんでしょ。さあ、諦めて剣を捨てな」

「うう……」

「早く」

「……………」

「五、四、三」

「わ、わかった！ 捨てる！ だからやめろっ！！」

「二……一……」

ガラン、と大きな音とともに、床に剣が転がった。

「蹴りな。遠くへ」

女が顎をしゃくった。

ライは睨みつけるように、じっと剣を見下ろしている。

「……同じこと何度も言わせんじゃねえよ。蹴れ」

ライが蹴ると、剣はくるくるとコマのように床の上を滑った。

遠く、剣使いにとっては絶望的な距離を滑ってから、柱にぶつかって止まった。

「足、どけてやってくれる？」

ローブを抑えつけられていた足をどけられ、魔法士がもがきながら立ち上がった。

「その矢、抜いてやって。なるべく優しくね。そいつうっさいから」

「……………」

ライが肩に手をかけると、魔法士の少年はびくりと震えた。一気に引き抜かれ、ひつ、と喚いた。矢で抑えこまれていた傷口から血がどろりと噴き出し、ローブを朱に染めていく。

「治してやって」

「……できない」

「……………」

「本当だ！ 法術は使えないんだ！」

伸ばしていた腕から力を抜くと、女は魔法士に顎をしゃくった。

「自分で治しな」

「はい……」

魔法士は肩の傷口に手を当てると、不慣れな様子で「祝福」の祝詞を何度か呟いた。魔術を扱う彼にとって法術は専門外なのだろう。その効果は小さく、傷口が塞がるのは時間がかかった。

その間、ライは立ち尽くしていた。フィリーの方を見やり、彼女の方も彼を見返していたが、お互いの瞳の中に答えを見つけようとしてそれを失敗したかのように、二人の表情は変わらず真っ青だった。

「あそこまで歩きな」

言って、女は顎をしゃくった。

彼女の示す先、玉座の間中央横の石壁には、四つの金具が取り付けられている。ほんの短い鎖で壁に繋ぎ止められているそれは、黒光りする鉄製の枷だった。肩に近い高さに間を置いて二つ、床からすぐの位置に間を置かずに二つ。壁とその下の石床は、乾いたドス黒い色で醜く染まっている。

「早く行け」

ボウガンが揺れ、微かな金属音を立てて彼を急かす。ライは時間稼ぎをするようにゆっくり歩いたが、辿り着くまでに何が出来てもなかった。壁にこびりついた汚れをまじまじと見つめる。

「こつちを向け。鎧は脱いで置け」

言われるままライは向き直り、鎧を外して床に置いた。

女が魔法士に顎をしゃくる。慌てて駆けてきた魔法士が、ライの左腕を掴んだ。

「……そのまま聞いてください」

女には聞き取れないほどの小声で、魔法士が呟く。

ライが目を見開く。口を開きかけ、

「喋らないで……！ あいつに気付かれたらまずい」

女の視線が監視するように向けられているのを見やり、ライはそのまま口を閉じた。

魔法士は壁と向き合う格好……女には背を向けている。彼はそのままライの左腕を持ち上げると、壁から伸びた枷にかけた。ガチャ、と金属的な音をたてて錠が締まった。

「僕はあなた達の味方です。さっきはごめんなさい。でも脅されてやるしかなかった……」

「……………」

魔法士は屈み込むと、ライの左足を抑えた。ガチャ、とくるぶしの高さにある枷で固定する。反射的にライが足を動かそうとしたが、金具が微かに揺れただけだった。ぽたと雫が一滴、床に落ちて小さな染みをつくる。ライの額に脂汗が浮いていた。

「彼らのやり口を知ったのは、騙されて入った後でした。ずっと、こんな組織逃げ出したいと思っていました……でも無理だった。脱退者・逃亡者は死を以って償うこと。それが組織の掟だった……」

場所をずれ、今度は右足を抑える魔法士。されるままに拘束されながら、ライの瞳の中を、さまざまな思考が火花のように散るのが見えた。

「もう耐えられないんですこんなこと。……でも僕の魔法じゃ、あいつを倒すことなんてできやしない。詠唱してる間に撃たれて終わりです。だから、あなたに頼みたいんです。助けてください……」

右足を繋ぐと、魔法士は立ち上がり、最後にライの右腕をとった。伸ばさせ、手首に枷をはめこむ。だが完全にはしなかった。錠の金具は不安定に繋がっているだけだ。

「あまり力をこめないでください。奴が近づいてくる前に外れたら終わりだ。僕も殺さ

れる……」

「……………」

「こんなことしかできなくてごめんなさい。でも、でも……助けて……」
掠れた涙声だった。

「終わったあ？」

「……はい」

魔法士は女に返事を寄越すと、最後にすぎるような瞳をライに向けてから離れていった。

ライが反射的に身体を動かしたが、彼の身体は繋ぎ止められたまま、金具がよじれて音を立てただけだった。ごくり、と唾を呑みこむのが見えた。

女は拘束されたライを満足げに見やった。腕組みをし、唇を吊り上げて笑みを浮かべる。

「聖騎士様なら、磔も本望でしょ？ さ、今度はお嬢さん」

言って、フリーーに向けたボウガンを揺らした。

フリーーはナイフを握りしめたまま、女を睨みつけている。

「その物騒なもん、捨てる」

「……………」

「耳ついてますか？ あんたもこうしないとわからない？」

ボウガンがつうつと横へ動き、ライの方へと向けられた。

フリーーは唇を震わせたが、そのままナイフを床に落とした。言われるまま、遠くへ蹴る。

「んー、あんたは……」

ボウガンを微塵も動かさないまま、女は首を巡らした。ライが拘束されたところから玉座前を横切った対面の壁に、同様の拘束具が据えられている。

「いいや、遠くて面倒。こっち使う」

言って、鞭を床へ置くと、玉座の裏から用意しておいたらしい手錠と足鎖を取り出した。ぽいと魔法士へ投げて寄越す。受け損なうて頭に当たり、魔法士は半泣きになったが、女に睨みつけられすぐに作業を開始した。フリーーの手を後ろで組ませ、手錠をかける。足を揃えさせ足鎖で拘束。四肢を揃えさせられると人間は従順になる。上に立つものは下のものへそれを強いる。長き歴史に渡って連綿と受け継がれてきた、支配と被

支配の儀式のようなものだ。

フリーが拘束されたことを確認すると、女はボウガンを構えた手を下ろし、腰へ吊り下げた。鞭を手にとり、ひゅ、と一度、試すように床を打った。びしつ、と一筋甲高い音が、玉座の間を切り裂くように響く。

女は懷から小さな箱を取り出し、煙草を一本抜き取ると、火をつけて口に咥えた。ライが魔法士へ視線を送ったが、魔法士は微かに首を振った。詠唱と、ボウガンを再び構えるまでの時間。負ける、と言っているのだろう。

「ずうつと昔、この城を作らせた王様がね、そんな拘束具を付けさせたらしいよ」
うまそうに紫煙をくゆらせながら、女が言った。

「王様は、真実の絆を求めてやまない、純粹無垢な人だったんだって。それで真実の絆の形をどうしてもこの目で見てみたいって言って、玉座の間にそんなものを作らせた」
沈黙の部屋の中を、視線が交錯する。女はそれに気付く風もなく、煙草を吹かした。右手は鞭で床を打ち続けている。

「村や町から、恋人や夫婦、親友……絆が強いと言われてる人を連れてきて、二人を磔にしたの。部屋の端と端で、向かい合わせてね。それでね、一時間に一本ずつ、二人の骨を折っていくわけ。両手の指の骨十本。両足の指の骨十本。腕と脚から各一本。全部で二十四本、丸一日」

煙草を捨てて靴でにじり消すと、女はもう一本取り出した。

「途中でどちらかがギブアップしたら、そいつは自由にしてやった。でも相手の方は磔のまま、今度は金槌で折れた部分を叩いていくの。一時間に一回、力をこめて。死ぬまで」

「……………」

「王様はね、みんな、そんなギブアップなんてしないだろうと思ってたの。相手に地獄の苦しみを味わわせておいて自分だけ楽になろうなんて、そんなねえ？　なんたって真実の絆だし？　でも王様の予想と違って、誰も一日間保たなかった。どんなに愛し合っているという夫婦でも、仲が良いと評判の親友同士でも、駄目なの。たった一日のことなのに、駄目なの。初めは助けてって言って、それから諦めて耐えて、殺してって言い出して、最後にまた助けてって言うの。自分だけ、助けて」

女は玉座の上から一同を見下ろしながら、唇だけが独立して生きて動いているような、歪んだ笑みを浮かべた。

「結局、真実の絆なんて何処にもありませんでした。王様は人間に絶望して悪魔と契約を結び、国を滅ぼしてしまいました。魔の者となって今も人間界を彷徨いつづけています。……切ない話よね」

女は三本目の煙草を取り出し、火をつけた。玉座から下り、ゆっくりとフィリーに歩み寄っていく。

「あんたらは、どう？」

立ち尽くしたフィリーの顔に、ふっと煙を吹きかけた。突然煙を浴びせかけられ、フィリーが身体を仰け反らせる。足の鎖がピンと伸びきると同時にバランスを崩し、背中から床に転がった。

「きさまっ！」

ライが叫び、身を乗り出した。四肢を縛る鎖にガシンと引きとめられ、息を詰まらせる。ハツとした顔で右腕の方へ顔を振り向けた。……錠は大丈夫のようだ。

フィリーはしばらく咳き込んでいた。女が屈み込むと、咳き込む彼女の髪を掴み、ぐいと引っ張った。頭を上げさせられ、フィリーが悲鳴を上げる。ライの顔がドス黒く染まった。

「離せえっ！」

女は構わず髪を引っ張る。ぶつりぶつりとフィリーの毛が抜ける。

「やめろお！！」

「うるさい」

鞭が唸り、フィリーのシャツの肩口が裂けた。

「きさまっ！！ 何を——」

「うるさいと言ってるの。聞こえないの？」

再び鞭がフィリーの腰を打つ。

ライが口を閉ざした。

あまりの怒りにか、身体がぶるぶると震える。

女はしばらく髪を引っ張ろうとしていたが、やがて諦めたらしく手を離れた。支えを失い、フィリーの頭が床に落ちる。彼女が喉の奥ですすり泣くような声をあげた。

腕を掴み、女はフィリーの身体を引き摺った。後ろから魔法士が、顔を俯けてついていく。ライの少し前まで来ると、女は手を離れた。彼からよく見えるように、フィリーの身体を蹴転がす。

ライはぎりぎり歯を噛み締めている。女を射抜くその目は猛獣のようだが、所詮は檻の中の猛獣に過ぎない。

女はそんなライの顔を楽しむように見つめながら、口からふうつと煙を吐きだした。そのままゆつくりと煙草を宙に掲げ……フィリーの腕に押し付けた。

「いやあああつ！」

フィリーが悲鳴をあげながらのたうった。ライが吠え叫びながら身を乗り出したが、鎖は微動だにしない。ガシン、ガシンと猛り狂い、やがて止んだ。右腕の錠が外れなかったのは僥倖だ。

フィリーの左腕に、小さな焦げ跡が焼きついた。

ライの口から、噛み締めすぎたか、折れた歯が一本転がり落ちた。

「殺す……。ぶち殺してやる……っ！」

「その格好でよく言うよ」

女は笑いながら、火の消えた煙草を放り投げた。足元を見下ろす。

「あんたはうるさい。うだうだ泣くんじゃねえよこのタコ」

言うとな女は懷から、分厚い布切れを取り出した。屈み込んで丸めると、フィリーの口にぎゅつと詰め込む。

「ゲームしよつか」

視線だけで人を射殺せそうな目で睨みつけるライ。焦げ跡を手で覆いながらぐもつた嗚咽をあげているフィリー。二人に等分に視線を向けると、目を爛々と輝かせて女は言った。

「そんなに怒らないでさ。遊ぼうよ。ね？」

「……………」

「クイズを出そう。第一問♪ 一足す一は？ さあいくつでしょう！」

ライは女を睨みつけたまま、ぐつと口を引き結んでいる。開くと何かが爆発するのではないかというように。抑えこむように、じっと耐えている。

女はそれを楽しそうに眺めていたが、やがて鞭がしなった。空気を裂く唸るような音とともに、フィリーの背が裂ける。

「タイムオーバーです。間違えるとペナルティあるから気をつけてくださいねー。第二問。二足す二は？ さあいくつ！」

「……………四」

「正解！ ご褒美に鞭回避だ！ 代わりにどうぞ！」

フィリーの背に、細長いミミズ腫れが加わった。ぷくりと膨らんだ腫れの真ん中が線のように裂け、血がゆつくりと滲み出してくる。

ライの全身が細かく震えた。正常な呼吸ができなくなったように、口を開け閉めする。右腕の拳がぐつと握り締められるのが見えた。魔法士がそれを見ながら、慌てたように小さく首を振っている。

鎖が微かに動くと同時に、女が口を開いた。

「第三問。証拠不十分のまま迷宮入りとなった、ヨムズ村集団毒殺事件の真犯人って、だーれだ？」

ライが目を見開いた。フィリーも硬直したようだった。

魔法士が首を傾げる。女は口もとに笑みを浮かべながら続ける。

「ヒント。毒の調達はとある組織が請け負いました。けれど小さな村のこと、部外者が入り込むのは目立ちすぎます。だから実際に井戸にそれを混入したのはその組織のメンバーではなく、村の内部の者でした。……つまり、内部に手引きした人間がいたということ」

「……そんな」

「すなわち、生き残った人間の中に実行犯がいたということ」

「でたらめを言うな！」

「ああ？ でたらめだあ？」

鞭が唸り、三度フィリーの背を打った。皮膚が裂け、血が滲み、彼女の背で幾筋もの川の流れが出来上がる。

背を庇うよう芋虫のように身体をずりずりとずらす彼女の腹を、女が勢い良く蹴りつけた。

「やめろおっ！ 彼女に手を出すなっ！！」

「足だものー」

ライは口を開けたが、もはや言葉も出ないようだった。

「……いいカオ。じゃ、お望み通りあんたで許してやる」

ピシッ、とライの頬が裂けた。血が糸のようにつうつと流れ、顎から垂れ落ちる。怒りに焦点を失っていた目がふつと戻った。

認識が麻痺してついていけないのか、驚いたように女を見ている。

「どうしたの？ やっぱ嫌？ 格好つけてみただけ？」

「……ぐ」

「交代したけりやいつでも言いな。すぐに彼女の方に変えてやるから、さ！」

「がっ！」

鞭が蛇のように彼に襲い掛かった。上から、横から、斜めから。

「……っ！ ……ぐ！ ……ぐあ！」

人は意識を集中させれば、身体の一部に対して防御力を幾重にも高めることができる。騎士達の修行過程にはその訓練があり、彼らは精神力で肉体強度を高める技術を叩き込まれる。

「ごあっ！ ……ぐ、く……あぐっ」

だが女はそれをさせなかった。攻撃個所を次々に変え、ライが構えた部位を嘲るように外して鞭が打つ。剣や棍とは異なる流線形の動きに惑わされ、ライの反射はついていかないようだった。たちまちかまいたちに襲われたようにシャツが破け、全身がずたずたに裂けていった。

「う、があっ！ ……っつ！ ……ぐ、う……ぎゃ！」

赤いミミズ腫れができ、皮膚が切れ血が滲んでいく。既に彼は、自分が今何処を攻撃されているかすらわかっていないだろう。歯を食いしばって耐えていられたのは最初だけ。今や小さな檻の中を逃げ惑うモルモットのように、逃げ場のない空間でそれでも痛みから逃れようと、必死に身体を仰け反らせている。

……鞭がやんだ。

ライの身体から力が抜け落ち、がくりと顎が落ちた。枷がなければそのまま前のめりに倒れていただろう。ピンと張った短い鎖が蜘蛛の糸のように腕を繋ぎ止め、彼が床に倒れこむのを防いでいる。それが幸か不幸かは別として。

「……交代したい？」

女が言った。

ライは項垂れたまま答えない。女は屈み込んでフィリーの顔を覗き込んだ。フィリーはふるふると小刻みに首を振った。

女が鞭を腰に結わえた。煙草を取り出し、火をつける。口に咥え、うまそうに一度煙を吐き出してから、指に挟んだ。身を震わせながらもがくフィリーを無視し、ライの方へと向かう。

三步の距離。

女が立ち止まった。

「ねえ、助けてくださいって言っちゃえ？　ぼくだけでも助けてくださいって言っちゃえ？　そいつとぼくとは何の関係ありません。見知らぬ他人、単なるセフレ。どうだろうと知ったこつちやありませんって言っちゃえ？　そしたらその魔法士なんかじゃなくて、今度からあんた奴隷にしてあげるからさ」

ライは動かない。

女は一步、前へ進み出た。腕を伸ばすとライの顎を掴み、強引に上げさせた。頬と額の皮膚が裂け、顔中を血が伝っている。血が目に入りこんだらしく、彼はぎゅつと瞼を閉じて振り払った。

次に開けた瞬間、その目が大きく見開いた。

女が指の間に挟んだ煙草を、さらにその目に近付けた。

「……つぶすよ？」

ライが喉からかすれた悲鳴をあげた。上体を反らし、少しでも遠ざかろうとする。だがすぐに壁に阻まれた。近づいていく煙草から逃れるように首を捻る。

「動くな」

女がさらに一步近づき、左手でライの頭を鷲掴みにした。前に引っ張り、すぐに押し出して後頭部を壁に叩きつける。

力を失った頭をまた引っ張ると、煙草を目に近付けていく。ゆっくり、ゆっくり。もう指数本分の距離しかない。

ライのこめかみから、脂汗が滴り落ちた。

「答えは？」

「……………」

「……了解い。一つくらいつぶしてみ——っ」

ガチャンと枷が外れる音とともに、ライの右腕が旋回した。

近づいた女の首を、彼の腕ががっしりと抱え込んだ。衝撃で女の手元がぶれ、煙草がライの頬に押し付けられる。ライが悲鳴をあげながら頭を振り、ぽろりと床に落ちていった。

「ちよ、な、何よこれ！」

喚く女の頭を腕と胸で抱え込んだまま、ライはぎゅつと目を瞑った。胸元のロザリー

がぼうつと小さく発光する。白い光がゆつくりと溢れ出すと、やがて彼の全身へ染みとおるように広がる。

収束する闘気。

「いや！ やめて！ やめてやめてえ！ ごめんなさいごめんなさい！！」

喚きながら女は身体をもぎ離そうとするが、鍛えられた腕に固定された首は抜けない。女がめちやくちやに二の手を振り回す。ライの顔に爪が突きたてられ、ぐつと肉を抉りながら引つ掻いた。頭を掴み、後頭部を壁に打ち付ける。腕は緩まない。

「——ごっ……」

膝蹴りがライの急所を突き上げた。緩んだ腕を強引に振り払いながら、もう一度。鎧の無い麻のズボンに膝がめり込む。ライの口が、金魚のようにぱくぱくと開いた。

目がかつと見開かれ……さらにもう一度膝蹴りを喰らい、光を失ってがくつと顎が落ちた。腕が振り解かれ、身体の横でだらりとぶら下がる。

だが収束した光は、既に爆発に向かって傾斜し止まることはない。

女は気絶したライを忌々しげに睨みつけた。だがその身体に満ちた光が溢れようとしているのを見てとったか、慌てて床を蹴りつけ——

「氷よ、結べ！」

魔法士の放った魔術がその足を凍りつかせた。

女が首を捻って魔法士を見る。目が見開き、同時に口が何か言葉を発したようだが、光に包まれかき消されていた。

ライの身体から十字に走った光の衝撃波が、女に直撃した。無音の轟音とともに、白光が女の全身を包み込む。

光の中に飲み込まれ、彼女が絶叫をあげた。聖なる十字に灼かれるその姿は、不死者でも悪魔でもなく人間のものだ。だが十字はその中に潜む魔を見抜いているかのように、彼女を灼き尽くす業火となった。

光が止み、女がどすつと床に倒れた。

外傷はないが、身体の内側を灼き尽くされたのだろうか。既に事切れていた。

九人。

「我・神の名の下に命ず・傷を癒せ」

魔法士がライの頭に手をかざし、数回“祝福”を唱えた。

裂けていたライの頬の傷口が、見る間に塞がっていく。赤黒くぷつくらと腫れていた煙草の痕が、少しずつ小さく薄れていった。

後頭部から流れ出ていた血が止まる。

ライは微かに身じろぎすると、うつすらと目をあけた。

「……う」

「気がつきました？」

「ここは……」

スイッチが切り替わるようにハッとした表情をして、反射的に身体を動かそうとしたライだが、ガン、と枷に抑えこまれた。

衝撃が全身を貫いたらしく、身体を仰け反らせて苦悶の声をあげる。

「……ぐ」

「動かないでください。相当胃にきてるはずですから」

「……あの女は？」

「あのとおりです」

言って魔法士は、床に倒れた女へ顎をしゃくった。女は床を抱え込むように倒れたまま、身じろぎ一つしていない。

「もう息はありません」

「良かった……」

「ほんと、無茶しますよ。怪我が酷い上に、あんな技まで使ったんですから。ロザリーを媒介にしてるけど、あれ、かなり自爆技でしょ。そのままおっ死んじやうんじやないかと思っ、気が気じゃなかった」

「武器なしじゃ、他に手がなくてさ……。へへ、ぎりぎりだったかな」

ライは力なく笑みを浮かべてみせた。ハッと気付いた様子で首を反らせ、魔法士の肩越しにフィリーの姿を見やる。

フィリーはさつきと同じ。手錠と足鎖をはめられ、口に布で嚙をされて、横様に転がったまま気を失っていた。

「あいつは……」

「無事です。背中と腰の傷口は塞いでおきました。煙草の痕も、完全にではありませんが、あまり目立たないくらいまでは。僕の法術では、完全には治せないんです。時間が経つてから、ちゃんとした法術師でも治せなくなってるかもしれない」

「……そうか」

「通信機で他の奴らの様子を探ってみました。反応はありませんでした。僕以外、全滅したようです」

「そうか。みんな、上手くやってくれたんだな……。じゃあもう、守護人形も機能が止まっているはずだ。逃げよう。もうたくさんだ……」

仲間達の死の光景を思い出したのか、ライの顔がくしゃつと歪んだ。極度の緊張と恐怖心で抑えこまれていた感情が、溢れて彼を呑みこもうとしている。塞き止めていた井戸から水が、ごぼごぼと漏れてくるように。

ライはぎゅつと目を閉じると、振り払うように小さく首を振った。

「……これを解いてくれ。鍵の場所はわかるか？ いや、まず彼女のを頼む。外してやつてくれ」

「回復が先ですよ。傷が酷い」

魔法士がライの額に手をかざした。『祝福』の光が広がり、滲み出ていた血が止まる。ローブを探りハンカチを取り出すと、魔法士は血に濡れたライの目元を拭った。されるがままになりながら、ライが激しく瞬きをする。

「おれは、もう大丈夫だから。彼女を自由に——」

「視界、はっきりしました？」

「ああ。それより——」

「目、つぶされなくて良かったですよ。見えないんじゃ、楽しめませんもんね」

「え？」

「後で教えてください」

魔法士がそつと、秘密の打ち明け話でもするように、ライの耳元へと口を寄せた。

「自分の女が目の前で犯されるのを見てるのって、どんな気持ちができるものなのか」

「……………」

言葉は間違いなくライの耳に、一字一句余さず入ったはずだ。

だが脳がそれを理解することを拒んだのだろうか。彼は呆けたような顔で、もう一度、

え？ と問い返したただけだった。

どうやら笑おうとして失敗し、中途半端な表情のまま、口を動かした。

「なに……？」

「あはは、僕のこと信じてたんですか？ おめでたいというか。あの女生意気で嫌いだったんで、殺してもらいたかっただけです。ま、みんな死んじやったみたいだし、今日から僕がリーダーかな。それもいいや」

がちや、と鎖が伸びて枷が鳴った。ライは表情を失った顔で、首を振り向けた。そして初めて気付いたようだった。一度は自由になった右腕が、再び拘束されていることに。今度はきつちりと最後まで、錠が嵌めこまれていることに。

「あは、いい顔してる。一難去ってまた一難、でも今度はどうしようもありませんね。おっと、これは一応没収」

魔法士は言うど、ライの胸元のロザリーを掴んだ。闘気を溜めおく十字のよりしろ。ぶつと細い鎖ごともし取り、床に放り捨てる。

目だけで、ただそれを見ているライ。魔法士は口元に細い笑みを浮かべると、右手を彼の目の前に掲げた。拳を握り、開く動作をゆくりと繰り返し返す。

やがて下ろすと、ぐつと前へと突き出した。

ライの身体がびくつと震えて腰を引いたが、壁に阻まれた。

「……っ！ ぐ……おあ！」

「心配しなくてもお兄さんの相手は、彼女が終わった後たっぷりしてあげますよ。僕、両方大丈夫ですから。上手いんですよ、ほら」

「な……おあ。なに、を……」

「人の心を壊すには、外側からだけじゃ駄目なんです。痛みには耐性ができますからね。遮断されたら面白くない。外と内から。いろんな方向から。構えきれないように。そうすれば簡単だ」

「……っ。く、う……がつああ、や、やめ——」

構わず魔法士の左手がライの胸元へ伸びる。シャツの上からなぞり、爪を立て、ゆつくりと下へ這って降りていく。枷と鎖が激しく壁に当たってじゃらじゃらと音を立てた。逃れるように身をよじっていたライの体が、堪えきれないようにひくひくと震える。

「逃げないでよ、素直じゃないな」

「お……あつ」

「ほら、こっちの方は正直なのに」

「くう……く……お」

魔法士の手が、ライの服の中にもぐりこんだ。右手がズボンの裾から、左手がシャツの裾から、両手がそれぞれ別の生き物のように動き、体を這い、つまみ、揉みしだく。ライの瞳の奥に真つ暗な闇が広がっていく。彼の内に残っていた最後の意志の欠片が、ゆっくりと流れ出していくのがわかる。

「では最後に、さっきのクイズの真犯人の動機を教えておこうか」

ライの体を弄くりながら、魔法士が言った。目を瞑り、お気に入りの音楽でも聴くように耳を澄ませた。うんうん、と小さく頷いた。

ライには、声が聞こえなかったようだ。絶望の中に映し、目が虚ろに宙を見据えたまま、時折力なく掠れた声だけが喉から漏れる。体が自動的に反応しているように。

「それはね……『みんなが嘆く顔を見たかったから、悲しむ声を聞きたかったから』だそうです」

「……う、……うあつ……」

「怖いですよね」

「……………あ」

「おっと、まだ駄目だよ」

魔法士がすつと手を引いた。

ライの仰け反らせていた顎が、かくんと力なく垂れ下がった。荒い息遣いの中に、ひくひくと小さな嗚咽が混じる。目からぼろぼろと零れ落ちた涙が、汗と混じって頬を伝っていった。

魔法士はくすくすと面白そうにそんな彼を見やると、くるりと踵を返した。

「続きはあとでね。とりあえず、そのまま見学しててよ」

顔を上げその背を見送るライの瞳の中に、もう意思の光は見えない。

それでも口だけが半ば自動的に、言葉を発した。

「や……めろ……」

魔法士は意に介することなく、フィリーの傍らで足を止めた。

屈み込むと、横ざまに倒れていた彼女の肩を掴み、仰向けにする。足鎖を解くと、自らの足で彼女の二の足を開かせた。

「やめろ……っ。やめろ。やめろやめろやめろおおおおおっ!!」

魔法士が羽織っていたローブを脱ぎ捨てる。膝立ちに屈み込んでズボンのベルトに手をかけたところで、フィリーが目を見ました。かつと彼女の目が見開き、布の詰め込まれた口からうーうーとくぐもった悲鳴があらる。

もがく彼女の肩を抑えつけ、魔法士が覆い被さった。

「や……やめて……。やめてくれえ……。やめてくれよ……」

掠れた声とともに、ライの頬を涙がぼろぼろと伝った。

泣き虫ライ。小さな幼子のあの頃に戻ってしまったように。わあわあと泣き叫ぶ。

構わず魔法士は懷からナイフを取り出すと、フィリーの胸元へ持っていた。暴れ回る彼女を抑えつけながら、ゆっくりと着衣を切り裂いていく。

豊かな乳房が露わになり、生白い腹部が露出した。

彼女の身体の抵抗が徐々に弱まっていき、やがて感情の導線を切ったかのように、瞳から光が消え失せどんよりと濁った。

だらりと動きを止めた身体。上から下まで一直線に裂けた服を、魔法士は乱暴に剥ぎ取った。

「さ、楽しもうか。時間はたつぷりある。……と、これ邪魔だな」

言うと、フィリーの薬指から指輪を抜き取り、ぴん、と弾いて捨てた。投げ捨てられた指輪がころころと転がり、壁にぶつかって倒れる。

それを見届けると、魔法士はゆっくりと腰を上下に動かし始めた。

＊

どれくらい時間が経ったろうか。

人形を相手にしているように、魔法士は強引に潜り、一人で喘いだ。その声だけが部屋に反響していった。

フィリーは声を発しなかった。いつの間にかライの声もやんでいた。

ことを終えた後もしばらく余韻に浸っていた魔法士が、ようやく目を開いた。下になったフィリーの髪を愛しそうに撫で、体を起こす。

ズボンを穿き、ローブを着なおすと、傍らに置いてあった杖を掴んだ。フィリーもライも反応を示さない。構わず、魔法士は杖を宙に掲げて言った。

「真実の絆を、確かめてみようか？」

口から布を外した瞬間、フィリーは舌を噛み切った。

それで死ぬるのだと思っていたのだろう。実際は舌からの出血で死ぬのは難しい。口から血を流し、フィリーは魔法士に無理矢理“祝福”を受けた。駄目だよ、と魔法士は困ったように笑う。絆を確かめないと。真実の絆をさ――

殺して、と縋る彼女の耳元に、魔法士は命の大切さを説いた。フィリーは助けて、殺してと何度も喚き、魔法士の言うことも聞ける状態ではなかった。

「やれやれ。こりやだめだ。放棄、と。面白くないなあ」

魔法士は肩を竦めると、またフィリーに覆いかぶさった。両手を伸ばして首にかけ、ぐぐつと体重をかけて絞めていく。

フィリーの足が、もがくように宙を掻く。

ばたついていたその足が動かなくなると、玉座の間には静寂が落ちた。

「これで十人。あと二人、か。随分少なくなっちゃったね。ちよつと急いで殺しすぎちゃった感じ。もう一人は何処行ったんだろうね？」

魔法士がこちらに問いかける。ライの方へ向かっていった。

手を伸ばし身体を弄ぶが、ライは反応を示さない。現実との接点を遮断してしまったように、目が虚ろで何も映していない。

魔法士はつまらなそうにため息をつく、と、持っていた杖を振り上げた。勢いをつけ、繋がれたライの右腕の関節部分に振り下ろす。鈍い音がする。

ライの瞳が開いた。次いで木霊す絶叫に構わず、魔法士は再び杖を振り上げる。

悲鳴。泣き声。喚き声。骨が折れていく鈍い音とともに、ライは狂ったようにそれを繰り返した。声はもう言葉の形を成していない。獣のような声に魔法士は顔をしかめ、叫び狂うライの眼前で、あ、い、う、え、お、と発声をした。

両腕、両足を終え、指の骨が半分以上折れたところで、ライの悲鳴は途絶えた。

急速に勢いを失っていき、首がふらんと垂れ下がる。

魔法士は杖を放り投げると、ライの亡骸を満足そうに眺めた。

「あと一人だね」

答えを期待してなされたわけではない呼びかけ。

応えるように、気配が動いた。

魔法士が後ろを振り返った首筋に、そっとナイフを突き立てる人影があった。

小柄な人影が、魔法士の首に突き立てたそのナイフを、ぐっと引く。切り裂かれ、噴き出した鮮血が、ぱあっと霧のように宙に散った。

血を撒き散らしながら崩れ落ちていく魔法士。その首を切り裂いたナイフを持っているのは、ノブルだった。いつの間にかここまでやってきていたらしい。魔法士がライに気をとられている隙に、背後に歩み寄っていたのだろう。

ノブルは糸に引かれるように顔を持ち上げると、壁に礫になったライの亡骸を見やつた。首をぴくんと下げ、転がったフィリーの裸の死体を見下ろす。

そのまま絵の一部になってしまったかのように、ノブルはぴくとも動かなかった。まるで時が止まってしまったように。ぼうと立ち尽くしたまま、動かなかった。

十一人。

【裏切者のモノローグ】

私とみんなの目の前を、遺体が次々と運び出されていく。深い黒紫色に染まった顔色の、もはや生きてはいない人の形をした物体。あまりに多量なため、丁重に扱われることもせず。荷物を積み込むようにして、大きなカートに乘せられていく。

それを見ながら、みんなは泣いている。つらそうに顔を歪め、歯を噛み締めて。どうして、という疑問の声と、誰にも向けられない悔しさの言葉。まだ生活の匂いの残る村の中を、嗚咽が音楽となって流れていった。

私も目から涙を流した。たくさん死体の顔を思い浮かべて、悲しくなるよう努力した。顔の皮膚が、強張ったような表情をつくった。そして私はみんなの肩を叩くと、かっつてシスターにそうされたように、胸に抱きしめ頭を抱えた。そうするものらしいということを私は知っていて、それは必要な手順であった。

悲痛に歪む顔と、嘆き悲しむ声。そんなみんなの様子を見ると、私の中の井戸が満ちていく。粘土でこねたものではない。もっと奥から、彼らの中の深く暗い井戸の底から汲み出された真つ黒な液体が、私の中の井戸を満たしていく。ぽっかりと空洞だっ

た胸が詰まり、熱を帯び、私は懸命に彼らを慰め続ける。絆という言葉が私の中で形を為し、少しずつ少しずつ、欠けた何かが埋まっていくことを自覚する。

可哀想だ、みんな可哀想だよ。みんなにはなんの罪もないのに。

どうしてこんな目に遭わなければならぬのだろう。どうしてこんなに苦しまなければならぬのだろう。

胸の奥から溢れる想いで、私は彼らを優しく慰める。頭の片隅で彼らの首が締め上げられ、体がすり潰されていく。目が見開き、苦痛に顔が歪み、唾液が漏れ……瞳の奥に映った絶望のかげら。胸の中でまた彼らを哀れみ想う気持ちが溢れ、私の心の井戸を満たしてくれる。可哀想だ、みんな可哀想だよ。みんなにはなんの罪もないのに。どうしてこんな目に遭わなければならぬのだろう。

私達は仲間だよ。生き残った仲間だよ。これから先も助け合って生きていこう。つらいかもしれない。苦しいかもしれない。でも乗り越えていけるよ、仲間が一緒なら。

みんな私の仲間だよ。大切な大切な仲間だよ。

仲間を想う気持ちというのは素晴らしいものだね。

ああ、とてもとても素晴らしいものだよ。

【本章・第七章】

——守護人形制御室——

螺旋に続く階段を、ノブルはゆっくりと歩いている。

玉座の間を抜け、中央塔の内側をぐるりと巡る、長大な螺旋階段だ。制御室に通じる唯一の通路。今その階段を、ノブルは一人、登っている。魂の抜けた木偶人形のように、足を交互に動かして。

彼の足から顔までは、べったりとした血糊で赤く染まっている。その顔には表情がなく、目はガラス細工のように意思を映していない。足だけが単調な機械仕掛けのように動き、身体を上へと運んでいく。心が碎けた人間。死者のような足取り。

階段を昇りきると、ノブルは突き当たりのドアを押し開けた。躊躇いなく。カーテンが陽光を遮断し、部屋には闇が澱んでいる。部屋の奥に据えられた制御用魔導器の唸りが、低く耳へと飛び込んでくる。

小さく頼りないノブルの背中が、ゆっくりと部屋の中へと踏み込んだ。首を巡らし、周囲を見渡す。その動作も緩慢で、まるで首振り人形のようなのだ。

窓際の床に、倒れた人影のシルエットがある。闇の中なので今はよく見えないが、あの男の首が裂けた死体だ。溢れ出した血が、絨毯を奇妙な色彩に染め上げている。噎せ返るような血の匂いが、部屋いっぱいになり込めていた。

ノブルは死体に気付いたようだが、反応らしい反応も見せなかった。ゆっくりと魔導器に歩み寄ると、懷からナイフを取り出した。ぎゅっとしがみつくようにナイフを握りしめると、糸に引かれるように抱え上げる。そして取り落とした。ナイフは彼の手を離れ、絨毯の上へと音もなく転がった。

ノブルが首を振り向けた。

その顔に、様々な表情が弾けていった。

驚いた様子はあまりない。あの見透かすような冷たい視線。そして、子供が失敗したときに浮かべるような、諦めを包んだ苦い笑みに変わった。

悲しげに潤んだその瞳から、ぼろっと一筋涙が零れ落ちた。

「……やっぱり、あなたか」

言う、ノブルの頭はゆっくりと力を失った。

かくり、と首が傾げるように揺れると、そのまま倒れ込んだ。自分の腹から刃が生えて
いることを、彼は確認できたのだろうか。

可哀想なノブル。哀れなノブル。薄々気付いていたのに告発できずに悩んでいる君の
姿は、とても胸を打つものだった。健気なノブル。仲間想いなノブル。

「み、んな……」

震えながら伸びた手が、宙をさらう。

「ごめん……ね」

今一步のところで力を失い、ノブルは動かなくなった。

十二人。

【本章・第一章】

——内通者——

△戦闘開始一時間前・城中央塔頂上、守護人形制御室▽

「さあ、ゲームの時間だよ」

男は最後に一言そう告げると、手にしていた魔導通信機の紋様をなぞり、全体通信を遮断させた。仄かに発光していた光が消え失せ、通信機が機能を止める。砦内の仲間達への放送は、それで終わりだった。

ゲームの時間。詳しい戦術の説明も演説も無く、そのたった一言で通じたようだ。砦内にいる男の同胞達が準備を始める、その気配が伝わってくる。

「待ち遠しいな」

男はポツリと、そう呟いた。

まだあどけない顔立ちをした、童顔の男である。青年……いや、少年と言った方が適切だろうか。彼が闇ノ目の頭目だと言われれば、ほとんどの人間はまず首を傾げるはずだ。

しかしすぐに気付くのだ。目を見つめるだけで人の奥深くまで侵入し腐食するような彼の気配に。ねっとり絡みつくような悪意が、男の周囲の空気に漂っている。

男はソファから立ち上がると、部屋を横切って窓辺へ立った。窓に映った自分の顔を、見透かすように眺めている。燕尾色の分厚いカーテンは、まるですべての光をその部屋から遮断しようとしているかのようにだ。夜明けまで一時間の猶予がある今の時間、たいした意味もないのだが。

男はカーテンをさっと滑らした。陽の昇らぬ刻ではあるが、塔の頂上のこと、見通しは良い。窓の向こうに顔を向け、望遠鏡を使い、闇を切り拓くようにしばらく目をずがめていたが、やがて見つけたようだ。小高い丘の上に佇む人影の群れ。

十二人の仲間達を。

男は窓の向こうへ視線を向けたまま、愉しそうに口もとを歪めた。

「裏切者よ。ありがとう」

くくく、と搾り出すような笑い声が部屋に響いた。

「奇襲作戦も、君の密告のおかげでおじゃんってわけだ。罪悪感？ 悔悟の念？ そんなものを感じる心など、君は持つてはいないはず。ボクらはヒトさ。汚いヒトさ。心は暗闇で満ちている」

歌うように、男は続けた。

「すべてを見つめ、すべてを理解せよ。君のために用意されたこの舞台で、仲間達が喘ぎ、苦しみ、絶望し……脆く儚い絆のすべてが、完膚なきまでに砕け散るさまを見届けよ。その過程を辿ることによって初めて、ボクらはこの世の真理を悟ることができるんだから」

男は口もとだけでくすくすと笑った。人が喜びに浮かべる笑みとは対極を為すような、どこかバランスの崩れた奇妙な笑みだ。だがその歪み具合には、陰惨とした芸術作品のような、心惹かれる魅力があった。

どろりとした視線を窓の向こうに向けたまま、男は心底愉しそうに、また言った。

「裏切者よ。ありがとう」

「……どういたしまして」

言うと、ガラス越しに私の顔に笑いかけていた男は、こちらを振り向いた。私の手は懷からナイフを取り出すと、男に歩み寄り、首を切り裂いた。

男は笑みを浮かべたまま、真紅の飛沫を撒き散らす。

私はそれをじっと見つめている。

私の身体の中から、じっと。

男が動かなくなってしまうと、私は窓辺に歩み寄った。カーテンの隙間から仲間達を見やる。そろそろ戻らなければ心配するだろう。私が途中でやられてしまったのではないかと心配するだろう。

大丈夫、私は死なないよ。私は立派な斥候役、みんなの一員なのだから。必ず一緒にやり遂げる。村のみんなの雪辱戦だ。

あの日の死体の群れとみんなの泣き顔を思い出すと、溢れる想いが私の胸を浸す。あの日、私は生まれ変わった。絆を信じられるようになった。井戸の乾きを恐れることもない。みんなの涙が、悲しみが、私に絆を教えてくれた。

やり遂げよう。力を合わせて。直、この城は私達の家となる。私と十二人の仲間達。

十三人の素敵な家。みんなは死んでしまうけれど、最後に一緒に戦おう。死を前にした私達の前に、恐れるものなど何もない。

ああ。みんな死んでしまう――

私は決意と裏腹に、とても哀しい気分になる。

彼らを待っている残酷な運命に怒りすら覚える。

仲間を想う心が、愛が、私の中に想いを形作る。そうして彼らへの絆が自分の中で、根付いているのを自覚する。

乾いていた私の井戸には今や、こんなにも清涼な水が湧き出し始めている。こんこんと湛えられる水。みんながくれた、絆の結晶。

決意を曲げるわけにはいかない。みんなの想いを無駄にするわけにはいかない。私は見届けなければならぬ。喘ぎ苦しみ絶望する、私の大切な仲間達の最期を。ときにはその視界の中から。ときには透明な存在となって。苦しいだろう。辛いだろう。しかし私は頑張れるはずだ――

十二の死体を数えた私は、これまでにない絆の重さを抱えて、絶望し全身が震えるほどに、満たされているはずなのだから――

“透化”の術を使って姿を消すと、私はなんとなく心地良い気分になり、部屋を出た。偵察の報告内容の台詞も既に考えてある。私の声が、喋ってくれるだろう。

井戸が渴いて仕方ないのだ。

どんなに清涼な水を注ぎいれても、たちまち乾いて干乾びていく。だが、仲間達が私を救ってくれる。私の井戸を満たしてくれる。

ひよっとしたら――

彼らは私を怒るかもしれない。裏切者と罵るかもしれない。けれども私は構わない。

私達は皆同じ、裏切者であるのだから。

心に底深い井戸を持つ、人間という名の裏切者であるのだから。

【簡易死体検案書】

● … 所属 … 闇ノ目
○ … 所属 … 龍の牙

● 識別番号 … 一 ― ①

性別 … 男性

死亡したところ … トーエンハイム砦 / 中央塔頂上 守護人形制御室

死因・手段及び状況 … 失血死。小振りの刃物により前面から頸動脈を切断。

追加事項 … 危険視していない仲の人間に不意打ちを受けたものと推測される。抵抗の形跡は見られない。万歳の格好。

○ 識別番号 … 二 ― ①

性別 … 女性

死亡したところ … トーエンハイム砦 / 城外周

死因・手段及び状況 … 脳挫滅。頸部への矢、首後ろまで貫通。胸部にも矢による刺創。

○ 識別番号 … 二 ― ②

性別 … 女性

死亡したところ … トーエンハイム砦 / 城外周

死因・手段及び状況 … 失血性ショック死。腹部、胸部へかけて七本の矢による刺創。

○ 識別番号 … 二 ― ③

性別 … 男性

死亡したところ … トーエンハイム砦 / 城外周

死因・手段及び状況 … 心破裂。全身に十四の刺創。両耳剥離、右人差し指、左中指欠損。

追加事項 … 傷口のうち十三が一 ― ②の矢のものと一致。心臓への一つのみ別種で、二 ― ⑧が持っていたものと一致。

●識別番号…一―②

性別…男性

死亡したところ…ト―エンハイム砦／テラス

死因・手段及び状況…内臓破裂。大型の槍にて腹部を抉られたことによる。

○識別番号…二―④

性別…男性

死亡したところ…ト―エンハイム砦／テラス

死因・手段及び状況…頭部失損と内臓破裂の競合。両腕失損。超重量級鋼鉄矢。

追加事項…人間の手による殺害とは考え難く、守護人形が動作していたものと考えられる。

●識別番号…一―③

性別…男性

死亡したところ…ト―エンハイム砦／城内部／断罪の十字路

死因・手段及び状況…脳挫滅。頸部への矢。全身に火傷による爛れ。

追加事項…薬物服用。幻覚・戦意高揚によるトランス状態にあったと考えられる。

●識別番号…一―④

性別…男性

死亡したところ…ト―エンハイム砦／城内部／断罪の十字路

死因・手段及び状況…脳挫滅。攻撃的魔術による頭部貫通。

追加事項…薬物服用。一―③と同種のもの。

○識別番号…二―⑤

性別…男性

死亡したところ…城内部、断罪の十字路

死因・手段及び状況…心破裂。胸部に刃物による刺創。

●識別番号…一―⑤

性別 …男性

死亡したところ …トーエンハイム砦／城内部／断罪の十字路

死因・手段及び状況…頸骨骨折。背後から力任せにへし折られている。

追加事項…薬物服用。一―③と同種のもの。

○識別番号…二―⑥

性別 …女性

死亡したところ …トーエンハイム砦／城内部／迷いの小路

死因・手段及び状況…脳挫滅、内臓破裂の競合。全身損壊。

追加事項…超重量級の凶器にて潰されたことによる。人間の手によるものとは考え難い。

○識別番号…二―⑦

性別 …女性

死亡したところ …トーエンハイム砦／城内部／悦楽の間

死因・手段及び状況…脳挫滅。頸部への矢による刺創。

追加事項…背中に刺創、八箇所。傷口は一―⑦の保持していた矢と一致。

●識別番号…一―⑥

性別 …女性

死亡したところ …トーエンハイム砦／城内部／悦楽の間

死因・手段及び状況…鋭利な刃物による頸部切断。

○識別番号…二―⑧

性別 …男性

死亡したところ …トーエンハイム砦／城内部／悦楽の間

死因・手段及び状況…頭部打撲による頭蓋骨陥没、脳挫滅。

追加事項…両掌に複雑骨折。凶器はバイオリンで、指紋は高確率で炭化した一―⑦のも

の。(他と一致しない)

●識別番号…一―⑦

性別 …男性

死亡したところ …ト―エンハイム砦／悦楽の間

死因・手段及び状況…焼死。全身炭化。

追加事項…性別は骨格からの推定。闇ノ目構成員名簿からの情報と合わせ確認。

○識別番号…二―⑨

性別 …女性

死亡したところ …ト―エンハイム砦／悦楽の間

死因・手段及び状況…脳挫滅。頸部への矢による刺創。

追加事項…この傷口は他の死体に刺さったいかなる矢とも別種のもの。調査中。

●識別番号…一―⑧

性別 …女性

死亡したところ …ト―エンハイム砦／城内部／玉座の間

死因・手段及び状況…心臓発作。

追加事項…高濃度の衝撃波を被撃。

○識別番号…二―⑩

性別 …女性

死亡したところ …ト―エンハイム砦／城内部／玉座の間

死因・手段及び状況…頸部圧迫による窒息死。暴行跡。

追加事項…暴行。一―⑨。

○識別番号…二―⑪

性別 …男性

死亡したところ …ト―エンハイム砦／城内部／玉座の間

死因・手段及び状況…外傷性ショック死。全身殴打。四肢拘束、磔。

追加事項…両腕関節両脚関節複雑骨折。右手五指、左手小指、薬指、中指、骨折。

● 識別番号…一―⑨

性別 …男性

死亡したところ …ト―エンハイム砦／城内部／玉座の間

死因・手段及び状況…頸動脈切断。背後から。

○ 識別番号…二―⑫

性別 …男性

死亡したところ …ト―エンハイム砦／中央塔頂上 守護人形制御室

死因・手段及び状況…内臓破裂。腹部に刺創。

追加事項…傷口より、一―①へのものと同一の凶器。

以上、死亡者二十一名。他、戦馬の死骸一頭確認。
生き残り一名は未だに不明。

なおギルド『龍の牙』の死体の側にはすべて、小さな白い花が供えられていた。
生き残りの手によるものと考えられる。

以上